

We

特集 自尊心を高める 性教育

女と男の家庭科新時代

8.9

2000



【講演記録】

メグ・ヒックリングスさん

メグさんの性教育

■メグ・ヒックリングスさんと田上時子さんの講演を聞いて
虐待を防ぐための性教育 稲邑 恭子

■連載

宮台真司の世紀末講座

家事神話―女性の貧困のかけにあるもの

竹信三恵子

はるか書房

【発売・星雲社】※価格は税別
東京都千代田区三崎町2-13-1 田辺ビル
TEL 03-3264-6898 FAX 03-3264-6992

女が年齢を 愉しむとき

本誌で好評連載中のエッセイ
「おんなが歳をとるといふこと」(木村栄)が
大幅加筆のうえ、単行本になりました。

木村栄 ● 新刊発売

仕事、家族、女性・老人問題、健康、自然
友人などテーマに、「齢をとるといふこと」の奥
行きや広がり、「面白さを」ときにはしみじみ
と、ときにはユーモラスに綴った、心にしみ
るエッセイ集。年齢という人生の贈り物を十
二分に味わい、愛しみ、愉しみたいあなたに
贈ります。 本体1700円

■ 好評発売中

■ **ピンポーンな生活ゼイタクな子育て**

古茂田 宏 先生一家のモノをもたない生活とユニーク
な子育て哲学を大公開 本体1800円

■ **モデルなき家庭の時代**

天野 寛子 子どもの生きろ力と豊かな心を育む生活文
化確立への緊急提言 本体1800円

■ **はじめて出会う女性史**

加美 芳子 現代語でわかりやすくドラマティックに描
く注目の日本女性通史 本体1800円

フ・エ・ミ・ツ・ク・ス・の・ほ・ん

■ 月刊『くらしと教育をつなぐWe』年間10冊(送料込み)7,500円

■ 『居場所考◇家族のゆくえ』水田宗子著 1,800円

家族がゆらいでいる今、私たちはどこに向かうのか? 映画や小説を題材に、女性の、そして男性の
さまざまな「居場所」を探る、日本のフェミニズム批評の第一人者による珠玉のエッセイ集。

■ 『Working With Women◇性暴力被害者支援のためのガイドブック』
フェミニストセラピー研究会編 1,050円

レイプなど性暴力の被害に遭った女性を支援するための方法を詳しく説明した手引書。
被害者を「助けてあげる」のではなく「自己決定をサポートする」ための具体的な方法が示されている。

■ 『セックスするなら眠りたい』ピピコクラブ編 950円

「ママ、僕はどこから生まれてきたの?」子供の問いをきっかけに、20代~30代の子育て中の女性たちが
性について本音で語り合おうと始めた回覧ノート。真剣だが明るくさわやかな女性たちの「本音集」。

■ 『わがままな女は幸せになれる

Let's◇自己表現・自己主張トレーニング』河村ふみ著 1,050円

自分の気持ちを素直に表現し、人と気持ちのよい関係を創っていくにはどうしたらいいのか。誰にでも思い
あたる身近な出来事を例に「自己表現トレーニング」をやさしく紹介します。(価格はすべて税込み)

Femix フェミックス 世田谷区池尻3-2-3-703 TEL/FAX 03-3424-3603
URL: <http://www3.alpha-net.ne.jp/users/femix>

©フェミックスは出版とフェミニストセラピーによるカウンセリングを事業の両輪としています。
遠方の方、外出が難しい方のために電話カウンセリングを行っています。☎0990-511320

特集 自尊感情を高める性教育

【講演記録】メグ・ヒックリングさん

メグさんの性教育 2

メグさんと田上時子さんの講演を聞いて
虐待を防ぐための性教育 稲邑 恭子 10

メグさんのワークショップ体験報告
性を科学的に教える 岡村 聡子 15

メグさんのワークショップ体験報告
自分を守るために 大沼もと子 18

WEN-DOワークショップ体験報告
からだで感じるエンパワメント 稲邑 恭子 22

■女と男の家庭科新時代

新・オホーツクの潮風荒く 江口凡太郎 25

熊本発・困ったときの一発ネタ 豆腐づくり 松原 美枝 26

食の歳時記 第15回 8月15日に思う 入江 一恵 28

■連載

女が歳をとるということ 第15回 木村 栄 30

書物道通/シネマの魔 ⑤
(老い)において(生)は自然化する 武田 秀夫 31

家事神話 ―女性の貧困のかげにあるもの③
不機嫌な装置(下) 竹信三恵子 36

宮台真司の世紀末講座 宮台 真司 40

新米議員のジェンダー議事録 ④
女たちは割烹着姿で後方支援 木村 民子 46

乱読大魔王日記 第15回 冠野 文 48

ひげのおばさん 子育て日記 ⑤ 育つ力 中畝 常雄 50

過去を振り返らない/先を考えない ④
「大人」ってなんだ? 松本 一郎 52

ジェンダーフリー大曼陀羅図鑑 第15回 蔦森 樹 54

自己表現トレーニング 番外編 ⑤
WEN-DOでパワーアップ 河村 ふみ 55

●編著者による本の紹介―子どもと若者の居場所 久田 邦明 62

●編集後記 64

表紙・イラスト 川口民子

メグさんの性教育

メグ・ヒックリングさんはカナダで二六年間にわたって、特に学齢前と小学生向けの性教育に携わり、彼女のワークを直接受けるには二年待たなければならぬというほどの大人気の人。『メグさんの性教育読本——Speaking of Sex』（発行リデオ・ドック 発売・木犀社）の訳者三輪妙子さんの招きでこのほど来日された時のお話から、三輪さんのご厚意で抄録させていただきました。

はじめに

私はカナダのバンクーバーに住んでいて子どもが三人います。元々の職業は看護婦で、性の健康について二六年にわたって教えてきました。

今、私の仕事は三つに分かれています。ひとつは幼稚

メグ・ヒックリングさん

園から大学までのクラスの生徒たちを対象に、もう一つは親が家庭で子どもに話ができるように親向けに、三つめは医者や看護婦、ソーシャルワーカー、教師、弁護士など、特に子どもと関わる専門家の人たちに話をしていきます。

まず、カナダで、この問題に関する状況がここ二、三十年の間にどのように変わってきたかということについてお話したいと思います。

昔、カナダにトリュドー首相という独身でハンサムの首相がいましたが、一九六九年に有名な法案を出しました。それまで公共の場で性の話をすることも避妊具を売ることも禁止されていたのを、個人がベッドルームで何をしているかということは政府や国が関与することではないということ、法律を改正したのです。

それまではカナダでも、十三歳になると女の子だけ集められて学校で三〇分だけ月経の話を聞いて、その間、男の子たちは外で遊んでいなさいと言われた、そんな性教育だったのですが、先の法案が通ったので、家族計画協会が避妊や性の問題を教育するボランティアを募りました。それで、私はボランティアとして、七〇年代は主に親たちに関わってきました。

親の中には私から学んで家で子どもに性のことを気楽に話せる人も出てきましたけれども、一方では家庭で子どもに話すことができないという人もいました。それで、自分の子どもだけでなく、学校中の子どもたちにこの知識を与えたいという、PTAのようなグループに呼ばれて学校に行つて話をするようになりました。最初の晩は親だけに来てもらつて、性の健康について子どもと話すのがいかに重要かという話を二時間します。そして何日か後に子どもと一緒に来てもらい、私が子どもたちに向かつて話しかけるのを後ろで聞いてもらいます。そうすることによつて家族全員が同じ情報を得られ、それを家に持つて帰ることができる、というやり方です。

今回、日本で、何人もの先生から、「親が性教育にあまり理解がなくて、性について教えてほしくないという親

もいるのですが、どうしたらいいでしょう」と聞かれましたが、私は性のことについて教室で話すときに、親たちにもなるべく来てもらつて一緒に聞いてもらうようにしたらどうでしょうかと伝えました。

子どもの性虐待

七四年から性の健康について教えてきたわけですが、七〇年代はまだ子どもの性的な虐待があるということ自体、皆、思いもしないし認めもしないという時代でした。

八〇年代に入つてようやく子どもへの性的虐待が存在するということに人々が気づくようになりました。それだけでなく、エイズが現れはじめたということが、性教育へのニーズが高まるもう一つの理由にもなりました。

子どもへの性的虐待が存在するということが認識されてから、性的虐待にあった子どもたちには何らかの兆候が見られるということが分かってきました。そして、こうした性的虐待にあった子どもたちに対してどういうふうに対応するかということについて、コミュニティー全体で学んでいかなければなりませんでした。

例えば警察官であつたら、そうした子どもたちに話をするときには、怖がらせないように私服の方がいいし、銃は持たず、警察犬は連れていないほうがいい。それから裁判所の態度も、まず子どもたちの言うことをちゃんと信じるというふうに変えなければならぬ。

裁判の様子も随分変わってきました。被害にあつた子どもたちが科学的な性器の名前を使つて、正確に何が起つたかということと話ができるようになってきたからです。自分に何が起つたかということを確認して、しかも性の健康について教えを受けている子どもたちであれば自分の性器の名前を習っていますから、科学的な名称を使つて大人が分かるように全部説明することができるようになつたのです。

警察や検察官や裁判官からその頃言われるようになってのは、被害にあつた子どもたちが一回被害に遭つただけですぐ届けるようになったということです。昔だと、何年も何年も被害に遭いながらそのことを言えなかつた子どもたちがほとんどでした。周囲の人に言つても信じられなかつたし、性についてあまりにも何も語られないので、子どもは、こういうことを言つたら怒られるんじゃないかと思つて、言い出せなかつた。ですから、性

に関しての社会全体の完全な沈黙が、被害にあつた子どもたちがそのことを誰にも言えないという状況をつくり出し、被害を何年にもわたるひどいものにしていたので、ところが最近では被害に遭つたらすぐに報告するという子どもたちが多いので、それを癒すこともずつとしやすくなくなってきました。

最近、カナダでは、被害を受けた子どもたちが大人になつてどのような状況にあるかということについての調査が行われました。その結果、サバイバーの人たちは大人になつたときにアル中や麻薬中毒になりやすかつたり、年中病気をしがちだつたり、人間関係をうまく結べなかつたり、家族の中で問題があつたりと、いろいろな問題を抱えているということが分かつて、全部ひつくるめると、それによつてカナダ全体で生産性が三〇％落ちていくという調査結果が出ました。これが出て以来、カナダの連邦政府は性教育がいかに必要かということを確認して、それに対してかなり支援してくれるようになりました。

性の問題について皆の意識が高まれば高まるほどいろいろな問題に目が向き、疑問もわいてきます。

一つは性虐待の加害者がなぜそうなるのか、という疑

問です。今では性虐待の加害者は男だけでなく同様に女性もいるということが分かってはいますが、女性であれ男性であれ、そのほとんど全ての人が自分自身が性虐待にあっています。

子どもに対する性虐待を、カナダとアメリカで詳しく調べた調査結果がいくつも出ています。カナダとアメリカでは子どもが十八歳になるまで、女の子の場合は露出狂の人に性器を見せられることなども含めると二人に一人が何らかの性虐待にあっています。男の子の場合は少ないと思われがちですが、三人に一人は十八歳までに何らかの性虐待にあっているという数字が出ています。私自身も二人の息子を持っていますので、女の子に対する性教育だけでなく男の子に対する性教育というものにも非常に関心があります。特に、男の子の三人に一人が性虐待にあっているという数字を知ってからはよけい関心があります。

就学前の性教育

カナダでは、保育園や幼稚園や家庭で、なるべく子どもが就学前から性教育を始めるといことが進んでいま

す。この年頃の子どもたちは何ら感情的なわだかまりとか恥とか嫌らしいとかいうことは持っていないので、スポンジに水がしみ込むようにすつと受け入れてくれるので、性教育をするのが一番簡単なのです。

例えば三、四歳の子どもに大人が一番ドキドキする、「ペニスがワギナに入って精子を卵子に届けるのよ」ということを言っても、「へー、そうなの。ところでお昼ごはんは何？」って聞いてくるくらい、本当にすんなり受け止めます。このことを教えるからといって、どうやってセックスをするのかということも教えているわけではありません。性交のしくみとして必ず教えますが、それは大人がすることですと言います。性器の科学的な名称を教えます。親でも先生でも、何かあったときにその名前を使っても怒られないような、性器のちゃんとした科学的な名称を教えます。

事业上、刑務所に行つて、性虐待の加害者と今まで何百人もの人と話してきました。その人たちが一様に言うことには、子どもを狙うときに科学的な性器の名称を知っている子どもは避けるということです。テレビからは決してそのような情報は得られないから、そういう子は親が性について話をしているから、何かあったら直ぐに親

に言うだろうから避けると言っています。

カナダでも、こんな科学的な言葉を子どもに教えることも絶対覚えられないはずないんじゃないかと言われることがあります。「子宮だの精巣だの」という言葉は少し難しすぎるとも、ただお腹で育つと言えはいんじゃないですか」とよく言われます。小さい子どもが初めて親に、「赤ちゃんはどこで育つの」と聞いてきたときに「それは子宮ですよ」と言えはいんです。例えば子どもが初めて肘という部分の名前を覚えるのは、肘という言葉をしよつちゅう使うから覚えるわけで、子宮も最初から子宮と言って、それを何度も何度も家の中で言っていれば、それは肘を覚えるのと同じようにすんなり覚えます。

私の本を見ていただくと、これだけは知っていて欲しいというチェックリストがそれぞれの性的な段階、年齢に応じて載っています。

就学前の子どもたちが知っておくべきものとしては、ペニス、精巣、陰囊、肛門、バルバ、ワギナ、クリトリス、子宮などの名前を知っていること、ペニスがワギナに入って精子を卵子に届けて赤ん坊ができるという性交の仕組み、赤ちゃんが子宮の中で育ちワギナを通して生

まれてくること、月経と夢精の基本的な仕組み、コンドームを拾ってはいけないこと、などがあげられます。

子どもたちがこれだけのことを知って学校に行きますと、学校で誰かがコウノトリが赤んぼうを運んでくるんだよなんて言っても、それを信じませんし、きちんとした知識があるということは子どもに力を与え、とても自信を持ちます。ですから性虐待にも遭いにくくすることができます。

小学校低学年

それから小学校低学年になると、子どもたちはまるでエンジンアのような気持ちを持っていて、物事がどういう仕組みで起こるのかということを引きつちり知りたいという願いを自然に持っています。低学年の場合、それまで正しい知識を得てこなかった子どもたちの誤解を直すことに大きな時間をさかなくてはなりません。例えば親が気軽に「赤ちゃんはお腹の中で育つのよ」と言ってしまうことで消化器系と生殖器系をこっちゃんにしている場合が多いので、「お腹の中だったら他の食べ物と一緒に食べて消化されてうんちと一緒に出ちゃうから困るでしょ」

という言い方をします。

こうした低学年の子どもたちはとにかくエンジニアのようなきつちりきつちり知りたいたいという気持ちを持っているので、例えばさつき言った、ペニスがワギナに入っているのは「精子を卵子に届ける」ということを言いますと、子どもによつては「そうしているときおしっこをしたくなつたらどうするの」といったような質問をします。そうした時には、ペニスが勃起しているときにはおしっこは出ない仕組みになつていると言います。

こうした教育をするメリットは、子どもが誤つた、汚いといった性に関する印象を持たないということです。例えば六、七歳の子どもが、ペニスがワギナに入っている時におしっこをするんじゃないか、おしっこするなんて、なんて汚いんだろう、で、セックスや性ってなんて嫌なんだろうっていうふうに思つてしまうと、それはすごく良くない印象を残してしまいます。子どものそういう「おしっこしたらどうするんですか」というような質問にキチンと答えてあげればいいんですけれども、そうしないでそのまま放つておくと汚らしいとか嫌らしいという印象ばかり強く持つてしまう。そうすると、それがポルノのような酷い性の描き方をしているものにその

まま目が向いてしまい、それをおかしいと思わなくなつてしまうような、そういう子どもに育つてしまうわけです。

思春期以降

それから第三段階は小学校の高学年ですけれども、高学年の子どもたちには健康な性的な関係について話すだけでなく、思春期の身体の変化についてもかなりの時間を割きます。というのは、この頃の子どもたちは身体の変化についていろいろ悩みを持っているので、そうした悩みに十分に答えてあげないと、性を歪んだかたちで見る大人になつてしまう可能性があるからです。この年齢になると前の年齢よりも両親と一緒にテレビをたくさん見ますし、性のことをジョークにしかできないようなアメリカ映画や、トイレにまつわるジョークばかりの映画を観る機会もあるでしょうし、お互いに性に関しての噂話をしたり、大人と一緒にニュースを観ることも多いと思います。

以前、あるお母さんからこういうことがあつたと言われました。八歳の娘からある日「オーラルセックスつて

なあに」って聞かれたんです。そのお母さんはびっくりしてしまつてどう答えていいか分からなかつたんですね。それで「じゃあオーラル（口を使う）って言う言葉は知っているでしょう、それはどういう意味だか考えてもらいなさいよ」って言ったんです。それで子どもは考えに考えて「なんだ、ブロージョブのこと！」って、ブロージョブってスラングでオーラルセックスのことなんです。オーラルセックスという言葉は知らないのにスラングの方を既に知っていたんです。お母さんはさらにシヨックで「あなたはいったいブロージョブってどうして知っているの」って聞いたたら、「だって、クリントン大統領が……」って言ったそうです。あの事件の時にはニュースでその言葉が盛んに使われていたんですね。子どもたちはその歳になればニュースを聞いていますから。

ここにいらつしやる、子どもがいる方や子どもに関連する仕事をしている方に申し上げますが、こつちが脂汗がでるような質問が子どもから来るといふことは、子どもがあなたのことを十分に信頼しているからなので、皆さんが素晴らしい親、素晴らしい教育者であるといふことの一つの証拠なんです。

中・高校生になりますと、性的に成熟した大人になるた

めの、例えば避妊や、性の感染症についての話が加わります。現在では性感染症が五八種類もありまして、そのうちの八種類が致死性のものです。私達が若いころは性感染症はただ二つだけで、そのどちらもが治癒が可能なものでした。ですから、これだけ今、子どもたちを取り巻く社会は変わっているんです。

こうした性の健康の話をしますと、いろんな反論がもどつてきます。特に小学校の高学年の子どもたちからの一般的な反応というのは、ペニスがワギナの中に入つて精子を卵子に届けるのをセックスと言うと「うわー、気持ち悪い」という反応が一般的です。「こんなこと絶対にしない」、と言うことが多いです。そういう反応が出てきたらそれをちゃんと認めて「そういうふう感じてほつとしたわ」と言います。そして、「大人になつてもセックスしたくなければ、一生しなくてもいいんですよ」といふふうには言いません。

性教育を行う上での指針

性教育を行う上でいくつか指針があると思います。

①女の子と男の子を一緒に教える

ひとつは必ず女の子と男の子を一緒に教えるということとです。分けて教えようとすると、男の子たちとうまく教えられないということがあります。というのは、男の子というのはどうしても成熟度が女の子よりも低いので、男の子が女の子と一緒にこの話を聞くと女の子のレベルに男の子も引つ張り上げられて、男の子だけに教えるよりも、教えるのがずっと楽になりますし、子どもたちも聞く態勢を持ち続けることができます。

②子どもからの質問をきちんと受け止めて回答する

二つ目の指針としては、子どもからの質問は一つ一つどれであつても、世界で一番重要な科学的な質問だと捉えるということとです。それがどんなに軽いノリのものであつたり、大人にとつてはショッキングなものであつても……この歳の子がこんなこと質問すべきじゃないわなんて思つてもいけません。どんなものであつても、子どもはちゃんと科学的で安全につながるような答を与えられて当然なのです。質問の仕方がかなりいい加減なものでも、こちらとしてはそれをちゃんと尊重して答えて出していかなければいけません。

③親たちに対して絶えず教え続ける

あと一つは親たちに対して絶えず教え続けるということ

とです。親たちの年代はモデルになるような性教育をできる親はいなかったわけですから自分自身がモデルになれるように努めなければならぬし、性に関する新しい情報は常に出てきますから、それを親に伝えなければいけません。

④性教育を毎年一回は学校で行う

それから子どもたちにも性教育を少なくとも毎年一回は学校で行う必要があります。学校に予算がなくて一年おきにしかできない場合もありますけれども、できれば一年に一回はやったほうがいい。

⑤ユーモアを大切に

最後にもう一つだけあげて終わりにします。性の健康やセクシュアリティについて子どもに話すときにはユーモアがとても重要だと思えます。面白いことがあつたら、子どもと一緒にゲラゲラ笑つてかまわないんです。■

(99年6月17日・東京ウイメンズプラザにて／まとめ・稲
呂恭子)

メグ・ヒックリングさんと田上時子さんの講演を聞いて 虐待を防ぐための性教育

稲邑 恭子

メグさんの講演に先立ち、今回三輪さんと講演会を共催した「女性と子どものエンパワメント関西」の田上時子さん（ビデオ・ドック代表）から、日本の子どもの虐待の現状と性教育の必要性について講演があった。

田上時子さんは関西で女性と子どものエンパワメントをテーマにした研修やビデオ制作・出版活動に携わっているが、なぜメグさんの性教育やCAPの活動の普及に力を注いでいるのか、またこの五月に成立した「児童虐待防止法」の問題点など、非常に示唆の多いお話だったので以下にご紹介する。

子どもを性虐待から守るために

八八年九月、カナダから帰国した田上時子さんは東京・埼玉の連続幼女殺人事件の報道を目の当たりにして、この国では子どもや女性の人権はどうなっているのだら

うと驚愕した。二歳半の娘がいた田上さんにとって、とても他人事とは思えない事件だったが、当時はあの事件を「性虐待」として取り上げるような視点は未だ日本にはなかった。

半年後犯人が捕まったが、娘の保育園で渡されたチラシを読んで、また脳天に一撃を受けたようなショックを受けた。「二度とあのような事件を起こさないために」と銘打ったその内容は、およそ現実的でない「使えない」防止策であったから。

そこには三つのが書かれていたが、最初にあげられていたのは「知らない人にはついていってはいけない」ということ。「知らない人」というのはまず大人の中でも定義の定まらない、ましてや子どもにとつてはあまりにも抽象的な言葉であり、誰を指すかわかりにくい。それに「性虐待の加害者は赤の他人」という根強い神話にも

かわからず、実は性虐待の75%から80%は「顔見知り」によって起きているのである。二つめは、「ひとりになってはいけない」ということ。性被害は公園で何人かで遊んでいるときにも起きるからひとりのときに起きるとは限らない。それに子どもに「ひとりにならないで」と言うのは現実問題として無理。そして三つめは「変質者に気をつけろ」ということ。変質者とはどのような人を指すか? どうやってそれを見分けると言うのか?

つまり世間では「性虐待は子どもがひとりのとき見知らぬ変質者によって起きる」と想定して防止策を立てたつもりになっていたが、このような防止策では子どもを性犯罪から守ることはできない。

このような状況の中で、自分にいったい何ができるか、何が一番必要かと考えた田上さんは、『わたしのからだよ!』(ローリー・フリーマン作 木犀社 400円)を翻訳して世に出すことを思い立った。当時、子どもの虐待について書かれた本はほとんど見あたらず、ようやく見つけた一冊も虐待は保護者からの虐待と定義されていたから。

本は第一版が数週間で完売し、毎日のようにサバイバーからの手紙や電話が届いた。大概は夜中にかかってくるので、寝不足になった。中には性虐待は「愛情のしる

し」だと主張する加害者からの手紙もあった。

久しぶりに日本に帰ってきて一番最初にできた新しい友だちが、全国のサバイバー。自分はこの人たちのために何ができるのだろうかとまた考えて、二冊目の本の取材のために再びアメリカに行った。二冊目の本『ライオンさんに話そう』(パトリア・キーホー作 木犀社 500円)は、性虐待を受けた子どものための本である。

最初の本『わたしのからだよ!』には、「あなたのからだはあなたのもの、あなたが嫌だと思ったときには嫌だと言っていい。あなたにはできることがある」というメッセージを託したが、それは当時ものすごい反発にあった。

「子どもに力があるなんてとんでもない。子どもには自分の身を守ることなどできない。だから私たちが守らなければならぬのよ」「こういう理念は日本には合わない。日本式のやりかたを考えなければ」

あまりに皆から言われるので、ほんとうにそうなのかと気持ちが揺らぎそうになったが、でも、どう考えても、アメリカやカナダであんなに効果が出ているやりかたがだめなはずはないと気を取り直す。子どもの心に、感情に、国境はないはず。嫌なものには誰でも嫌なのだ、と。これだけの効果が出ていると印籠のように数字を示せば、日本の人も納得してくれるだろうと田上さんは思った。

二冊目の本の取材で行ったアメリカで、いろんな専門家に会い、性虐待を防止するには何が必要か聞いてもらった。その中で印象に残った防止策が三つあり、「親業」と「コミュニケーションスキル」と「性教育」。これら三つを日本で伝えることを自分の役割としようと決意した。

「親業」は、当時、北米では子どもの虐待・性虐待防止の社会教育の筆頭であった。日本でもトマス・ゴードンのものが既に紹介されていたが、思春期の子どもには使えても、就学前の子どもには別のものが必要だと思つてエリザベス・クレアリーの本を訳した。

コミュニケーションスキルについては、子どもが嫌と言えるためには、その前に嫌だと感じる事ができなければならぬし、嫌だということを聞いてくれる人がいなければならぬ。子どもたちが小さいときから自由に感情表現ができるように、それを言葉に表現できるようにしたいと思つた。

性教育に関しては、従来あつたのはいわゆる純潔教育、避妊はどうしたらいいかの性器教育であり、部分教育ではない。もっと大切なことを教えたいと思つていた田上さんにとってメグ・ヒックリングさんの性教育はぴったりのものだった。

森田ゆりさんと一緒に九五年から日本で始めたCAP

も、『わたしのからだよ!』と同じような理念の、子どもが自分のからだを守ることができるようになるというものだが、この三つの課題のため、九九年に「NPO法人女性と子どものエンパワメント関西」を立ち上げ活動を続けている。

「子どもの虐待防止法案」の課題

5月17日に「子どもの虐待防止法案」が特別立法、児童福祉法の追加立法として成立した。これは親権の一時ストップなどの成果はあり、一歩前進といえるが、まだまだ不十分な点も多いということで、三年後の法改正に向けて、田上さんから具体的な問題提起があつた。

児童福祉法の28条に「子どもの虐待」という記述はあつたが、その法的な定義づけがなかったのが、今回それが明文化されたことで児童相談所が動きやすくなった。ところが、児童虐待は「保護者による」虐待と定義されているという限界がある。

保護者による虐待と定義すると、加害者は親もしくは親に代わつて親権を持つている人、福祉施設の看護者に限定され、学校での体罰や地域で起こる性虐待など、加害者が保護者ではない他のあらゆる種類の虐待は対象外になってしまう。つまり新しくできたこの法律に照らし

てみても、十二年前のあの事件は未だに性虐待とは言えないことになってしまっ。

もうひとつ気になるのは「猥褻な行為」を性虐待と言っていること。「猥褻な行為」というのは加害者を興奮させる行為のことで、子どもにとって性虐待がどういふことなのかという、子どもの人権という視点に立った見方ではない。だから「全ての大人による子どもの性的濫用」、「力関係によって子どもが搾取・利用されること」を性虐待と定義しなければならない。

また、子どもの虐待は身体的虐待・心理的虐待・ネグレクト（遺棄怠慢）、性虐待（左表の①〜④）と四つに分けられると言われているが、性虐待というのは、ただ殴るのは違い、一度でも起きると心的外傷になるような

児童虐待防止法の主な柱

- ◆児童虐待は、18歳未満の児童に対する①身体的な暴行②わいせつ行為③著しい食事制限や長時間の放置④心理的外傷を与える言動と定義する。
- ◆教師や医師、弁護士などは虐待の早期発見に努め、発見した場合は速やかに児童相談所などに通告しなくてはならない。
- ◆虐待のおそれがあるときは、児童相談所などが児童の自宅などに立ち入り調査できる。その際、警察官の援助を要請できる。
- ◆一時保護された子どもの親などは、児童福祉司などのカウンセリングなどの指導を受けなければならない。
- ◆児童相談所長は、親の意に反して一時保護などで入所させた子どもに対して親が面会や通信するのを制限できる。

（朝日新聞 2000.5.24）

非常に破壊力の強い虐待だが、日本ではその認識が希薄である。強姦罪や強制猥褻罪の刑罰もアメリカやカナダに比べると極端に軽い。以前から、児童相談所も性虐待が繰り返し起きないと動かないということが非常に気になってきている。これが新法の成立によって何処まで改善されるのか。

また、これまでは、刑法にあつた守秘義務の規定がネックになつていて、学校から虐待の相談電話があつても、かけてきた先生から虐待される子ども、虐待する親の名前は秘密にしてくれと言われていた。その意味では、今回の新法成立で子どもの虐待を発見したときに通報する義務が守秘義務より勝るとされたのは一歩前進。それでも未だ通告を怠つたことに対する具体的罰則がないので、通告義務があるということで現場の先生を説得し意識を変えていくのが大変だということ。

性虐待の加害者は、思春期——十五歳頃からその兆しが見えるのでその時期にどうにかやめさせたい。今回の法律は加害者への処罰や防止に関しては何も言っていないのでそのことも不十分である。

三年後の法律の見直しに向けて、これまであげたような様々な課題を検討し取り組んでいきたい、とのことだつた。

「枠組みのある受容」

『メグさんの性教育読本』（三輪妙子訳 発行ビデオ・ドック 発売木犀社 1800円）は、ラディカルなプログラムでありながら、肯定的なメッセージとユーモアとリベラルなバランス感覚に溢れ、誰にでも安心してお勧めできる貴重な本。就学前、低学年、高学年、中学生、大人と発達段階に応じた必要な情報が簡潔に的確に書かれており、遭遇するであろうあらゆる事態を想定して、それらに対応するための適切な知識や情報を早めに提供することによって、子どもたちの自立をサポートするという基本姿勢が貫かれている。

この本を読むと、性虐待を防ぐには、「何を話しても怒られないのだと安心できるような環境」を大人が子どものために用意することがいかに大切かが分かるが、親や教師が「何でも話していいんだよ」と口で言いさえすれば子どもが安心して話に来るといような簡単なものではないところが難しい。子どもたちの発言を聴くことがほんとうに楽しくてたまらないという様子のメグさんの姿勢は、受容的であるというのはどういうことかという最良のモデルを提供している。

特に私の印象に残ったのは、徹頭徹尾受容的でありながら、一方では、自分のプライバシーを確立し他人のそ

れも尊重すること（自分と他人との間に適切な境界線を引くことができること）を強調していること。そして子どもにとつてよりどころになるような基本原則を親が持ち、それを貫くことは、子どもに安心感を与えるということを押さえていることである。

先日、精神科医斉藤環の『社会的引きこもり』（PHP新書）を読んでいて面白い表現に行き当たった。へ「受容」には「底」や「枠組み」が必要。受容のための器の底が抜けては受容の意味をなさないし、制限なし、底なしの受容は相手に「呑み込まれる恐怖」を与えかねない」と。

どうも日本では子どもを管理・支配しようとする人は際限なくコントロールしようとするし、受容しようとする人もまた際限なく追認し相手に振り回されるということになりがちだが、この「適切な枠組みを作る」ことや「自他の間に適切な境界線を引く」という作業が一つのヒントになるのかもしれない。メグさんの性教育はその意味で「枠組みのある受容」の安定感を感じさせた。

◎メグさんの性教育ワークショップとファシリテーター養成講座の今後の企画などのお問い合わせは、「女性と子どものエンパワメント関西」（〒665-0056 宝塚市中野町4-11 TEL0797-71-0810 FAX0797-74-1888）まで。次回は12月に来日予定。

メグさんのワークシヨップ体験報告

性を科学的に教える

岡村 聡子

はじめに

「精子を卵子に届けるためにペニスがワギナの中に入ることをセックスと言います」

カナダ人の性教育の専門家、メグ・ヒックリングさんの子ども向けワークシヨップでのひとこまです。なんて単純明快で嫌みのない、正確な言い方なのでしょう！

六月十八日に横浜女性フォーラムで、十九日に横浜市南区の中村小学校で、メグさんの子ども向けワークシヨップとおとな向け講演会を聞く機会を得ました。かれこれ五年ほど前から母親向け性教育のワークシヨップをヨロヨロと行なってきた私にとって、この二日間は目からウロコの貴重な学びの時でした。印象的な場面をご紹介します。ながら二日間の私のメグさん体験をご報告したいと思います。

子どもワークシヨップ

メグさんの子どもワークはとても楽しい雰囲気です。「科学者になったつもりで考えてみましょう」から始まるワークでは短い時間の中でプライベートゾーン、男女の性器の名（ペニス、陰のう、精巣、ワギナ、卵巣、子宮）、セックス、出産、コンドームについてふれていきます。子どもが発言するたびにメグさんは「Good scientist」「Excellent」と言いながら子どもと握手したり、手をパチンと合わせたりします。子どもたちはそれが嬉しくてたまらない様子でどんどんワークに集中していきます。

最後にコンドームを取り出した時にはさすがの私もビツクリしました。私も家では、ペニス模型を使ってコンドーム装着実習をしたりコンドーム風船にして子どもと遊んでいます。この小さい子どもたちのワークにコンドー

ムを出すとは……ス、スゴイ。でも小さいからこそスルツとうけとつてくれるのでしたっけ。「これはコンドームセックスする時にベニスにかぶせて使います。もし道や公園や海岸にコンドームが落ちていても子どもはひろってはいけません。ごみ箱に捨てるのはおとなの仕事なんですよ」そっかー。子どもには正しい知識と同時にキチツとした制限も必要なのでしたっけ。子どもの安全をしつかり教えようとするメグさんの姿勢を感じました。

おとな向け講演会

メグさんは「三歳からの性教育」を提唱します。自身、子どもが就学する前から性器の呼び名を共有しセックスについて話し合いたいと思ひ、自分でもそうしてきましたしワークの中でもそう言ってきました。私の場合単純に、子どもが小さい年齢のうちに性教育を始めた方が親子共に楽しめたいから、と思ひていましたが、メグさんの主張には筋金が入っていました。ひと言で要約すると、性教育を小さい頃からしておけば子どもは自己尊重能力が高まり、親子のコミュニケーションがより健全に育ち、ひいては性的虐待から子どもを守りやすい。とにかく語って語って語ること。子どもがイヤがっても恥ずかしがっても無視してもいいから諦めずに性について

子どもに話し続けること。「あなたの子どもが親になる日までね」そのためには「あなたが性的により成熟する努力を続けること」「周りの人をも教育しているのだという自覚をもつこと」。無意識にやっている私と、ここまで冷静に厳しく意識化しているメグさんとはえらいちがいです。

メグさん番外編

メグさんは性器のよび名のスラングと幼児語を認めません。何故ならおとながより性的に成熟したおとなになることを妨げ、その子どもたちも正しい知識を与えられないことによつて性的虐待のターゲットになりやすいからという、きわめてまっすぐな主張です。

といつても日本で女性の性器を何と言えはいいのです。私のワークでもこのことは毎回とりあげています。日本の若いお母さんたちがどれだけ苦労しているかわかるだけに私はメグさんに聞かずにはいられません。日本には女性の性器に名前がありません。数年前まで私は、おまんこと十回言えは怖くない、みんなでおまんこ復活宣言をしましょう！とワークの中で言ってきたのですが、お母さんたちの心がスーッと後ずさつてしまうことを感じてそれはやめました。この日本の現

状をどうすればいいのでしょうか」メグさんの答えはまたまた明快でした。「性器でいいんですよ」。

翌十九日、すっかり彼女に惚れ込んだ私はプレゼントを用意していきました。横浜エイズ市民活動センター作のコンドームケース、日本で最近発売された女性用コンドームの試供品。そして大胆にもフェミックス刊「セックスするなら眠りたい」（私のサイン入り）。「日本語の本でごめんなさい」という私の言葉を、メグさんの著書の訳者であり通訳を下さった三輪妙子さんがメグさんに伝えて下さいました。「あなたはたくさんものを私にプレゼントして下さいましたわ。一九九四年の横浜国際エイズ会議の翌年、バンクーバーでエイズ会議がひらかれたの。それまでヨコハマを知らなかった。でも一九九六年からカナダではヨコハマが有名になったわ。次の来日の時にもお目にかかれる？ ありがとう。楽しみにしているわ」こうしてメグさんは私の中で大切な先輩となり、大好きな友人となり、人生のお師匠さんになったのです。

その後のワタシ

メグさんシヨックの興奮さめやらぬ次の週、私は以前から依頼されていた板橋区の小学校のPTAで約五十人のお母さんたちとワークをしました。しかし、そこでの

反応は……。女の子の性器の名前はというと「おちんちん、おまんじゅう、おちよんちゃん、赤ちゃんの出てくる穴」。「二十歳のわが子がHIV（十）と告白しました。あなたはどう対応しますか？」というグループディスカッションの発表では「エイズのことをまだ身近に感じたことがないので対応の仕方がわかりません!」。なんだか叱られてしまったような格好。あーこれが日本の現状なんだわ。五年前も今も変わっていない日本……。でも私はメグません。あと二十年たつて私がメグさんと同年齢になったら、メグさんのように五歳の子どもにコンドームを見せることができるようになっていくかもしれない。三人の子どもたちも成人して、その性教育の効果の是非を若いお母さんに話せるかもしれない。HIV（十）の人が友人にしているのがフツーになって、バディのボランティアが学校の授業の中に入るようになっていくかもしれない。「ウチのオフクロはよー、オレが幼稚園の時から性教育してくれたからよー、オレもキミに小さい時から性教育しようと思うのよー」と息子が孫に言ってくれるかもしれない（考えにくいけど……）。

とにかくメグさん、ありがとう！

（おかむら・そつこ）

メグさんのワークショップ体験報告 自分を守るために

CAPの活動に携わって

地域の中で、子どもへの暴力防止プログラム——CAP (Child Assault Prevention) の活動に携わっている。

この活動に参加するようになったのは、人の注目を浴びることが大好きだから、簡単な劇を見せながら、子どもたちの前で話をするなんておもしろそうという単純な動機からだった。それが私がかつて子どもの頃、「いじめられっ子」だったことも関係している。

私自身が子どものときに「そのままではあなたは大切な存在だよ」という肯定的なメッセージを受けとることができていたら、その後の人生どんなに楽だったろうという思いがある。いじめられる私は、「どこか問題のあるダメな人間で、いつも自分は不十分で、何倍もの努力をしなければいけない」と自分に不似合いなことにたくさん

大沼 もと子

のエネルギーを使って生きてきた。

CAPには「私は、私の心からだを大切に生きていきたいの」、だから「あなたもあなたの心からだを大切に生きていってね」というメッセージが根底にある。

自分が子どものときに欲しかったこのメッセージを伝えるために、シングルで子どもをいらない私でも、メッセージジャーとして地域のなかで子どもに関わることでできるCAPの活動は刺激的で楽しい。

性教育は「性の健康」のための「科学」

今回メグさんの子ども向けワークショップに参加したのは、CAPの活動の中で行っている子どもへの性虐待防止について考える上で、性教育の必要性を感じていたからである。というのは、「自分の心からだを大切にしてい

生きる」ためには、性的な存在として自分を受容し、肯定することが不可欠だし、そのためには自分のからだに對する正確な知識が必要だからだ。

メグさんの教え方は、性についての肯定的なメッセージに溢れている。私たちの「からだの健康」のためには正確な知識が必要のように、「性の健康」のためには性に対して正確な知識と情報を与える必要があり、「科学」として子どもたちにその情報を伝えるという考え方に貫かれている。

だからメグさんのワークシヨップは大人も一緒に見学できる。「性の健康」ついて子どもと大人が共通理解を持つことが大切で、子どもの発達段階に合わせてワークシヨップを毎年受けることが望ましいとされている。CAPでは子どもと大人のワークシヨップは別に行われるが、この子どもと大人を分けるという考え方は親や教職員の理解を得るのに一番苦労するところだ。それはなぜなのだろうということを考えてみると、メグさんのワークシヨップを見学して思いあたった。

メグさんの提供しているのは性についての科学的な（知識）なので、その言葉や内容について親も知っておく必要がある。メグさんが子どもたちに質問するのはからだの仕組みについてで、それについて「どう感じるか」

「どう思うか」という質問は一切しない。性器の科学的な呼び名を繰り返し一緒に口に出して練習するのは、日常でもその名前が使えるようにするためのだ。

一方、CAPでは子どもたちに「どんなときに安心か」「どんなときに自信を持っているか」「どんなときに自由だと感じるか」というふうな（気持ち）を認識させるための質問をしたり、暴力から自分を守るためにできることを一緒に考えていくための質問をする。しかし、「どんなことを言っても大丈夫」という安心感がないと子どもたちは自分の気持ちをオープンにできない。というのは、暴力は子どもの身近なところで——家庭や学校、地域の中で——大人が思っている以上に起きており、特に性的な虐待に関しては、子どもにとって安心できるはずの場所でも、信頼すべき人との間で起きているのが現実だ。あくまでも子どもの視点に立つてみると理解しやすいと思うのだが、加害者である大人がいる場では子どもたちは自分の気持ちをオープンにはできないだろう。

性教育と暴力防止のワークシヨップの根本にある考え方は共通しているが、その手法の違いは、（知識）と（感情）を扱うことの違いにあるように思う。

自分を守るためには何をしてもいい!

「自分のからだは自分のもの。誰も許可なしにあなたのからだに触れることはできない。とくにブライベートな部分、口と胸と性器に触らせてはいけません。もしあなたの許可なしに触れるような人に出会った時にはどんな方法を使ってもいいから逃げてね。嘔み付いても、すねを蹴っても、殴っても、ゲロをはいても、ウンチを漏らしても、何をしてもいいから自分を守るためにできることをあきらめないでしてね」というメグさんのワークショップの導入の部分は、CAPとつながるところだ。メグさんはユーモラスにジェスチャーを交えながら話を進めていく。

「ゲロをはいても、ウンチを漏らしても……」というあたりで、子どもたちにクスクス笑いが起き、当初の何が始まるのかなという期待と緊張感が一気にほぐれ、同時に「あなたは大切な存在だよ。自分を侵害する人に対して、自分を守っていいんだよ」というメッセージが即座に伝わる。

自尊感情を高める性教育

私が受けた性教育が教育といえるものなのかどうかは別にして、そこで学んだこと（女性のからだの仕組みを

学んだこと）が、「私のからだは大切で素晴らしい」ということにつながらなかつた。性に関する情報はメディアを通じて過剰なくらい氾濫しているのに、本当に知りたいうこと、知っておかなければならないことからは遠ざけられてきたし、あまりにも肯定的なメッセージが少なすぎた。もつと社会からも個人との人間関係からも肯定的に人と関わる方法を学びたかつた。肯定的なメッセージをどんなときにも使っているメグさんの教え方というのは私が子どもの時に一番欲しかったものだ。

自分を大切だと思える自尊感情は「そのままのあなたで素晴らしい」というメッセージを受け取って育まれていくものだということを実感した。自分のからだを自分のものとして大切にすると、そのための正確な知識があれば、自分がいつ誰とセックスをするのかしないのか、子どもを産むのか産まないのか……一つひとつ自分のことを自分で決めていくことができる。

全体を通して、確かな知識を学べると同時に自分のからだに起きている変化がとても素敵な体験だと語られていることが印象的だった。

子宮の筋肉は人間が持っている筋肉のなかで一番強いという話は、女は筋力では男にかなわないと思っていた私にとつて、自分がそんな強い筋肉を持つているなんて

うれしかったし、女性にとって力強いメッセージだろう。

また、出産時における子宮の中の胎児の様子を、飛び出す絵本を使って、ジェスチャーを交えながら話してくれたのだが、出産時に母親は子宮を収縮させることで胎児をハグ（抱き締める）しているのだという説明は新鮮だった。ハグしてリラククスして、ハグしてリラククスして……出産は母子共にそれなりに苦痛を伴う体験だと思うが、母親に抱き締められながら生まれてくるのだというのは素敵な出産のイメージだと思う。私は自分の母親から歓迎されない子どもとして生まれてきたという気持ちはどこかあつて、この話を聞いてすごく感動してしまつた。母親の感情はともかく、もうそれだけで十分だと思つてしまつた。

また、出産時に破水して赤ちゃんが出てくることを、胎児にとつて「初めてのウォータースライドを体験しているのよ」と説明するなど、ユーモアが随所に折り込まれている。子どもたちが楽しく学べるということもとても大事なことだと思つた。

私の知人が何人もこのワークシヨップに参加していたのだが、家庭で性の話がともしやすくなつたと言つていた。幼稚園に通っている女の子が「お母さんもお父さ

んとセックスをしているの？」と、尋ねたそうだ。母親はすかさず「もちろんよ！」と答えると、その女の子は「ふうくん」と言つてふだんと変わらずに寝たという話を聞いて、セックスについてごく当たり前のこととして親子で語れるというのはすごくいいなと思つた。

8歳の男の子は、その晩寝るときに「精巢は涼しくて、ペニスは押さえちゃいけないから」とメグさんに聞いたようにパンツをはかずに寝て、翌朝起きたときに自分のペニスが硬くなつているのを見て、「おちんちん、じやなかつた、科学的に言うとおペニスが腹筋の練習をしているんだよね」と、母親に教えてくれたそうだ。また何日かして夕食の時に、「セックスって何だつたっけ？」と聞くので、「ペニスをワギナに入れて、ペニスから出る精子を、子宮の中の卵子に……」「あー、わかつた、思い出した。おなかすいたよ」という感じで話が出るそうだ。

あと何十年先になるかわからないが、性教育の成果として自分の性を「私の手や顔」と同じように、「私のワギナ」、「私のペニス」と当たり前のように言葉に出すことにためらいのない世代が出現することを祈ろう。

（おおめま・もとこ「CAP凸凹」^{てびん}「神奈川県海老名市」スペシヤリスト）

WEN・DOワークショップ体験報告 からだで感じるエンパワメント

稲邑 恭子

英語講座の講師をしてくれたカイランからメールが入った。「カナダの護身術のインストラクター、キユースティ・バークレーが日本に来る予定だけど、誰か興味のある人いませんか?」「面白そう!」と閃いて、「かながわ女性センター」に早速予約を入れ、7月8日から9日にかけて、宿泊合宿を企画した。

「WEN・DO」は、カナダ、トロントのペイジ・ファミリーが合気道と空手をベースに開発した女性のための自己防衛プログラムで、1972年から、カナダ、USAやヨーロッパなどで普及している。大人の女性版CAPとでも言おうか。

日本で生まれた武道の優れた技法が欧米に渡って、欧米型の自己決定の思想や、ジェンダーの視点を取り込んで、日本的な曖昧さや家父長制の垢を洗い落として戻ってきてくれたのはほんとうに嬉しい。

その動きの秘訣は第一に動きに加速をつけることで力を増幅させること。第二に不意打ちで相手を驚かすこと。第三に動きを止めず素早く次の動作に移ること。第四に自分に対する揺るぎない自信。

攻撃のしかたやねらう体の部位により、「ソフトWEN・DO」と「ハードWEN・DO」の二種類に分かれる。「ソフトWEN・DO」は他人に教えていいが、「ハードWEN・DO」は相手に致命傷を与えることができるので危険だから、他人に教えてはいけない、という。

首を絞められたとき（武道や軍隊の体験者などプロにやられた場合、ノンプロにやられた場合、前から、後ろから）、床に押さえつけられた場合、とろろんな場合を想定し、有効な反撃の型を決めていく。

首を絞められたときに忘れてはならないのは、まず呼吸ができる状態を確保すること。後ろから羽交い締めにされれば、相手の腕の皮膚をつまみあげて顎をずらして落とし、

空気の通り道を確保し、しかる後に反撃に移る。

その間に性虐待、DV（ドメスティック・バイオレンス）、レイプ神話などについて、フェミニストの視点から簡単な講義と話し合いが入る。それからいろんな場面を想定し、身の回りのものを武器にすること、声を出すことや言葉も含め、どういう逃げ方・闘いかたが可能かという話し合いをする。傘や靴、スプレー等は武器として思いつくが、キイホルダーの鍵を、丸めた拳の指の間から一本ずつ出して、それを武器にする（上から振り下ろす）というのは名案。一例を挙げると、

電車で真ん前に座りじろじろ観られたとき悠然と鼻くそをほじくってみせて相手を気味悪がらせて撃退した例。

向かい側に座った露出狂にみんなが目を伏せるので「えっ、それってベニスス？」と大声で叫んで相手が逃げた例。デートしていた相手にいきなり襲いかかられて拒否したがやめない。「あなたって人をレイプするような人だったの！」と叫ぶと相手がハッとして手を止め、謝って帰った話。

車でどこかに連れて行かれそうになったとき、窓を開けて車中の書類を手当たり次第外に投げ捨て、相手が慌てて車を止めて散らばった書類を拾っている間にパトカーが駆けつけて御用!になった話。

家に入ろうとしているときに後ろから押し込まれそうになったとき、背後に人がいるように思わせて後ろを振り返

り「お母さん！」と叫び、相手もつられて後ろを振り向いた隙を狙って肘鉄や蹴りを入れて逃げ出した例。

エレベーターが止まって見知らぬ男と二人閉じこめられたとき、「さあ二人で楽しもうよ」と言われ、急に「私、閉所恐怖症なの、あ、気持ち悪い、どうしよう、吐きそう」とフラフラうずくまって口に手を当て難を逃れた例。

結婚式のパーティなどでダンスしていて嫌なさわり方をされたときなど、あまりおおっぴらに騒ぐわけにはいかなるときなどは、ネクタイの結び目の下にあたる喉元の柔らかい部分をじわつと力を入れて押す（確実に気分が悪くなる）とか、足を踏む。ズボンやヒールのかかとでひっかき下ろす、気分が悪くなったと今にも吐きそうなふりをするなどなど。

成功した例をとにかく集めて情報交換しましょうと講師のキユースティ。優しい顔立ちのどちらかというど物静かな感じの若い女性だが、気合いを入れるときの迫力は圧巻。

性被害に遭うのは自分の家、犯人の家、共通の友人の家、公共の場、車の順に多い。走って逃げることで80%、反撃に出ることで68%、大声で叫ぶことで62%が危機の回避に成功している。相手が武器を持っている時は冷静な説得が有効。嘆願することは相手に自分の力を再認識させるからあまり有効でない（痴漢に「やめて下さい」というのは、

ド迫力ですごみをきかせて言えば別だろうが、お願いしているように変だ。それを言うなら「何するんだよ、お前！」などと一喝するほうが効果的ではないか、とこれは私の意見。

人前で暴力を受けた場合、周りの人にカッブルだと思われると介入されずに放置されがちだが、それが赤の他人だと分かると75%が気遣って声をかけてくる。だから（たとえ夫であつても）「あなた誰なの？」と指さして、赤の他人だということを表明することがお薦め。

寝込みを襲われたときは大声で驚かせて人を呼ぶ（たとえ家にいるのは自分だけでも他に人がいることをアピールするために。犬の名前でも効果的）。猫でもスタンドでも手近にあるものを何でも投げつける。窓ガラスを割る（この音で隣人が警察に電話するわよと脅す）。

相手がベッドの足下まで来ているときは起き上がる暇がないので寝たまま蹴りを入れる（一緒に参加した河村さんの報告58ページを参照して下さい）。

それから忘れてはならないことは、加害者を撃退した後、すぐに警察に電話して被害にあったことを告げること。必要であるなら救急車も呼ぶこと。これは自分が被害者であるということを証明し、逆に訴えられたりしないために必要なことです。

何を隠そう、大学3年から4年にかけて、精神的にあまり安定が良くない時期、合気道の道場に入り浸りになっていった時期があつた。運動神経がないのになぜかあの時だけはスジがよいとほめられ、木刀まで買い込んで型の練習に励んだ。半年くらい毎日のように通い、その後ぱったり行かなくなった。その頃覚えた技はきれいに忘れてしまっているが、当時の私にとって、体を酷使して頭を空っぽにすること、攻撃性を発散させることが必要だったのだろう。

若いひとたちの悩みを聴いていると、武道でもやってごらんよと言いたくなる人が多い。攻撃性を発散する回路が八方ふさがりになっている今の日本の状況は子どもから大人への移行期にあるひとたちにとってきついことだろうなと思う。この何年か、自尊感情を上げることが大事だと、念仏のように繰り返してきた。ATはそのための有効な方法。でもこういうふう無理屈抜きからだでダイレクトに感じるエンパワメントは強力かつ爽快。

「私はその気になれば相手をぶちのめすほどの力を持っているが、それを発揮するときは自分で選ぶのだ」と思える自信、からだで感じるエンパワメントは強い。

今度は空手でもやろうかなと少し気持ちが悪くけど、格闘技の道場のマツチヨな雰囲気を感じて浮かべると気持ちが引く。これはやはり「WEN-DO」研修旅行を企画してインスタクターを養成しなくてはね。

連載

新・オホーツクの潮風荒く

江口凡太郎

北海道滝上高等学校・家庭科

反省。高校生は成長する存在だとわかっていながら、時として偏見や思いこみから、そのことを見失うことがあります。ある生徒の様子からそういう自分のおごりを深く反省しています。

「むかつく、あー、きもいきもい」
いわゆる「キレた」状態ではなく、これでもかかっていうくらい文句をブツブツと言いつづけ、反抗というより「嫌悪」を示しつつづけた生徒がいました。

最初のきつかけは服装や言葉づか

いといったマナー指導でした。どこまで話してもその生徒の態度は変わらず、ちががあかないので、帰ってもらいました。こういうケースでおさまりがつかないときは、たまにあることです。

そして、これをあまりにも繰り返すようであれば、自ら「おひきとりいただく」ことになるのです。その晩さらに、保護者とも一悶着あって、一層の難しさを感じました。

その後、何度か似たような指導上のトラブルがあり、今までの経験から、「こりやダメだな」なんとなくそう感じました。

ところが、だんだんとそういうケースがなくなりました。反対に彼女の方から用もないのに「ぼんちやーん」と声をかけてくるようになりました。指導のたびに「嫌悪」されてきたので、こちらとしても用がなければ近づきたくないのが本音です。

ときとうに聞き流しながら、まあ落ちて置いてよかった程度に感じていました。

今年度になり、どういうわけか彼女は私の担当する委員会や資格取得講座など、「選択」できる場面でも接する機会が多くなりました。偶然もありませんが、そればかりでない。「生徒指導原則対応」モードから「愛情ふり注ぎ」モードにギアを入れ替え、こつちからも意図的に声をかけ、ノートやプリントの感想にも一言多くコメントを書き続けました。彼女からも反応があり、気がつけばお互いに「たのしみ」な時間になっていました。一年前には想像もつかなかったことです。

さて昨日また、一年のある生徒に「お帰りいただきました」。この子は来年の今頃どうなっているか？「原則対応」の一方で、心の中でそう念じました。

熊本発・困ったときの一発ネタ

豆腐づくり

はじめに

ただ今育児休業真っ最中。仕事を離れ、家で時間を気にせず過ごす毎日。それはそれでのんびりぼんやりできて幸せなのですが、家族以外のひととの関わりもほとんどなく、だんだん頭も感性も鈍ってきているような気がしています。

さて、今回の一発ネタは「豆腐づくり」。日本人の食生活に欠かすことのできない大豆。この大豆はさまざまに加工され、形を変えて我々の食卓に上ってきます。きな粉やみそづくりを実習することもありますが、今回は豆腐のつくり方を説明します。

豆腐づくり

◎必要な用具 ボール、ミキサーまた

はすり鉢、大きめの鍋、しゃもじ、

こし袋、穴のあいた木箱またはザル、

木綿のふきん、温度計

◎材料 大豆 2カップ 水 にがり

◎進め方

①実習前日の放課後、子どもたちを集め、大豆を洗ってたっぷりの水につけさせます。

②翌日、大豆は水を吸収して2〜3倍の大きさになっています。その大豆だけをミキサーに入れ、つぶれやすいように水を適量に加えてミキサーですりつぶします（これが「呉」）。ミキサーがない場合はすり鉢ですりつぶします。

③次に大きな鍋にすりつぶした大豆（呉）と水をたっぷり入れて火にかけて、沸騰したら5分間まぜながら煮ます。

松原 美枝

八代第四中学校

この時、たかさんの泡が出てふきこばれそうになるので、火加減を調節しながら、鍋の底からしつかりまぜるのがポイントです（※これが大変なため、泡を消す消泡剤（食品添加物）を入れる豆腐屋さんも多い）。

④これを熱いまま木綿のこし袋（目が細かい方がよい）に入れてしゃもじなどで強く押しつけて、できるだけだけぼります。このしぼった汁が「豆乳」で、袋の中に残ったしぼりかすが「おから」です。

⑤次に豆乳の温度を測り、70〜75℃になったらしゃもじで強くかきまぜたあと、ぬるま湯で溶いたにがり液（注1）を少しずつ入れます。にがり液を入れたら、しゃもじで静かに十文字にまぜ、澄んだ部分ができかかって

きたらかきまぜるのをやめて10分ほど置きます。

⑥六のあいた木箱がザル、またはおにぎりを入れる網目状の弁当箱にふきんを敷き、鍋の中の固まっている部分を玉じやくしですくって入れます。最後にふたと重石をして10〜20分置いてできあがり。

ちゃんとした木箱がなくても、ザルにふきんを敷いてふたは平皿、水を入れた茶碗やボールで重石をすることもできます。調理室にある用具で十分です。ザルの形をした丸い豆腐ができ、子どもたちは大喜びします。

作ってみると、沸騰して泡がいっぱい出るのを五分間かきまぜるのも大変ですし、あつあつの呉を袋でしぼるのも大変です。子どもたちは四苦八苦します。でも牛乳のような豆乳ににがりを入れて、それがかき玉汁のように澄んだ汁と豆腐の固まり

とに分かれた瞬間と最後に型から出すときの子どもたちの驚きと喜びの混じった顔は何ともいえません。できあがった豆腐は冷や奴や麻婆豆腐にして食べます。

本物の豆腐は……

子どもたちにいろいろな豆腐のラベルを持ってきてもらいます（こちらで揃えておいてもよい）。それを見て、消泡剤の有無、凝固剤の種類を確認した後、漫画『美味しんぼ7』の「大豆にがり」を見せます。昔は漫画を見せていましたが、アニメ版のビデオがあるので今はそちらを見せています。同じ量の大豆からできる豆腐の数が凝固剤によって違うというのがよくわかります。安上がりな大量生産のからくりがわかります。本物の豆腐を味わった子どもたちに、本物を見分ける目を養ってほしいと思います。ラベルを見ていく

と、本物の豆腐を作っているのは、けっこう自分の町の昔ながらの豆腐屋さんだったりします。そんなところに見学や聞き取りに行ってもおもしろいと思います。

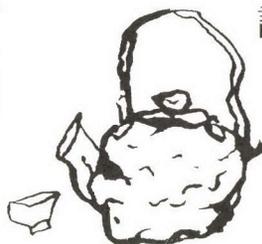
「大豆」は奥が深い食品で、豆腐を一発ネタとするより、大豆を育てる（注2）ところから始めて、いろいろな加工品をつくって調べて、総合学習で使いたい素材です……と思っただけでまだ実行できていません。どなたか実行されたらぜひお手紙を。

注1 サークルでは、岩塩から作ったにがりを、生協に納品している豆腐屋さんから分けてもらって使っています。このにがりなら、粒状のがり40グラムを水280ミリに溶かし、それを80〜100ミリ使うと、OKです。

注2 大豆を植えるなら、七夕の頃と近所のおばさんに教えて貰いました。若いうちに収穫すれば枝豆です。

食の歳時記

入江一恵



八月十五日に思う

五五年目の八月十五日がめぐってきた。十五歳だった少女は今年古稀を迎えた。歴史の記憶として忘れられない、忘れるべきではないその日、少女は学徒動員の板金工として、沖繩に飛び立つ特攻機製作所の工場跡（その年の三月空襲で全焼）にいた。焼けただれたヤスリの目立てがその日命じられた作業であった。そのヤスリを使って再び特攻機を作れるアテもないままに、ただ惰性で手を動かしていた。目の前にはスズで黒く

なつたボコボコのやかんがポツンと置いてあった。中身はサッカリンを溶かした甘い水。あたりはけだるい空気に包まれたいた。八月十五日——玉音放送と称するものの直前のこの光景はなぜか年を経ることに鮮明によみがえってくる。なぜサッカリンを溶かした水なのか、今もつてその理由はわからない。ただ砂糖の全く手に入らない時代、サッカリンの入手だけでも稀有の出来事だったのかもしれない。

現在、私の講義を受けている学生の何人かは「飽食」を間違えて「豊食」と書く。グルメ、ダイエツト感覚でいえばなるほど「豊食」のほうに似合っているのかもしれない。彼女たちには理解できないようであるが、当時の女学校の「家事」の授業では「救荒食」という言葉がしばしば登場した。おおぼこ、たんぼぼ、さつまいものつるといったものは我

が家の食卓にも時々顔を見せ、大豆粕やとうもろこしのパンは咽喉を通りにくかった。それは耐乏食というより半飢餓食に近いものであった。一杯の菜つばが刻み込まれた雑炊ほしさに夜八時まで工場で残業した。今日の昼食が旨かったのは蛙の肉が入っていたからだと言いふらす十二、三歳の養成工たちの顔は栄養失調でみんな青白く、ムクんでいた。

最近ヒョンなことから江戸期の料理本に興味を持ちはじめた。日本料理の集大成、和食の完成した時代といわれ、発行年の明らかなものだけでもなんと一八二冊に及んでいる。その発行年次を見ると文化文政時代がピークとなるのはうなずけるとして、あの飢餓で多くの餓死者を出した天明・天保期もひとつのピークとなっている。「凶荒凶録」に見る、出ない乳首にかぶりつく赤児の口もとから流れる血、飢えた野犬が人々を

襲うさまはまさに地獄絵、その時、江戸では贅沢の限りを尽くし、遊びの要素をとり入れた料理本が発行され、料理文化が花開いていた。寛政二年（一七九〇）に天明の飢饉の事情を記した大和田権兵衛の「管見録」によれば「食料の不足は必ずしも凶作によるものではなく、『穀留』などの処置や米の売買などの社会的要因は否めない」とある。この歴然たる食料の偏在は現在の地球にも通ずるものがある。天保期には救荒書が本格的に出版・頒布され、この救荒食の知識は再び第二次世界大戦中に活用されるところとなる。

当時の記録は私の心を掴んで離さない。食塩のとり過ぎに悩む現代人。しかし、如何に多くの人がナトリウム不足で死んでいったか——野草に含まれるカリウムとのバランス上、本能的にナトリウムを補うため人びとは古むしろを食べたという。むし

ろには染みついた人の足の汗に塩分があった。食物繊維の摂取は現代人の課題。当時はわらを刻んで食べ、繊維の取りすぎによる便秘は遂に死を招いたとある。「土粥」も登場する。植物プランクトンから成る白い土「けい藻土」。木の皮や草の根だけでは生きられない。人びとは米に代わるでんぶんを求めて、指一本ほどの「ところいも」を求めて八里の道を探し歩いたとある。飢餓と飽食のもつ意味がずつしりと胸にこたえる。

今月は「変わりごはん」と「錦松梅もどき」を紹介しよう。

◎**変わりごはん**（お年寄りにも好評）
材料 米300g／もち粟大さじ1／しらす干し大さじ2／大葉4枚／梅干し2個／白ごま少々
作り方

①もち粟（自然食品店などで）は一晩水に漬けておく。米にもち粟を入れ、普通炊飯。

②大葉は細い繊維切りで水に放す。梅干しは果肉を取りはずしほぐす。しらす干しは熱湯をかけておく。

③熱い白飯に②及び白ごまをまぜる。

◎**錦松梅もどき**

材料「煮出し汁をとったあとの材料使用」かつおぶし50g／出しこんぶ25g／松の実（アーモンド）15g／白ごま大さじ1／きくらげ15g／梅干し2・3個／醤油大さじ4／みりん大さじ3／さとう大さじ3

作り方

①かつおぶしは電子レンジで水分をとばすかフライパンでカラ煎りして細かくしておく。

②きくらげはもどしてみじん切り、松の実のみじん切り、梅干しは種をとり刻む。

③角切りにしたこんぶ、かつおぶし、梅干し、きくらげをひたひたの水で煮てさらに調味料を加えて水分がなくなるまで煮て、松の実、ごまを入れてまぜる。

（いりえ・かずえ／イラストも著者）

女が歳をとるといふこと

木村 栄

夜、テレビの前に寝ころんでなるべく長いドラマを観るのが、私の最高のリラクゼーション。特にからだに疲れて神経が興奮している時は、一度緊張をとらないと眠れない。肩の凝る深刻な特集も、どこが面白いのかわからない「お笑い」もダメ。気楽にストーリーを楽しめるドラマが一番いい。

「あーあ、寝るほど楽はなかりけり」と祖母から母に伝わった口癖を真似ながら、今日もクッションを枕に、毛布まで用意してごろりと体を伸ばす。観るほどに寛いで、やがてすやす

やと寝息を、そのうちゴーガーと軒をかき出す。自分の軒ではっと目を覚まして画面に見入り、いつしか又ゴーガー。

次に気づいた時は、CMタイムだった。どういふわけかCMになると途端に音量が上がる。

半眼に開いた目に映ったのは入れ歯の洗浄剤である。寝る前に、外した入れ歯を発泡剤を溶かした水に浸しておけば、翌朝にはすっかりきれいになっているというアレだ。コップに漬けた入れ歯の汚れがみるみる落ちてゆく映像が、睡魔の波間でぼんやりと歪み、半睡状態の耳に妙なコメントが聞こえてきた。

「……涙の助けなしに一日働いた目は、夕方にはくしゃくしゃゴロゴロして、開けるのも辛くなっていますね。顕微鏡で覗いてみると、ほら、こちらが進行したドライアイ。涙のクッションがないから、塵埃や煙草

の煙やまばたきで、角膜や結膜が傷だらけでしょう。まるで日照り続きの大地みたい。

そこで、『干天の慈雨』の番です。夜寝る前に、傷だらけの眼球を外して、人工涙液を満たしたコップにつけておけば、翌朝にはすっかり傷が癒えてツルツルしつとり、新品同様になってます。目は心の窓、あなたの美しい瞳のために毎晩欠かさずお手入れを！」

なに、今、なんて言った？

すっかり目が覚めてしまった。

涙の出ないシエーグレン症候群のドライアイで、夜のテレビなどもつてのほか。その渋痛眼で意地汚くテレビにしがみついていたせいとか、意識下の願望が夢うつつのあわいに浮上したのか、CMの「入れ歯」と私の「眼球」が入れ替わってしまったようだ。

折角の導眠剤が台無しである。

〈古い〉において 〈生〉は白熱化する

武田 秀夫

猛烈な暑がりだから夜は枕もとの窓を開け放し風を入れて寝るのが好きなのだ、それをやると妻がのどや鼻の粘膜をやられる。そこでぼくは窓のはじっこをそと開ける程度にして、その隙間から忍び入る紐のような夜気をまるで酸素不足の金魚のようにそっちに向けた鼻で感じ取りつつようやく眠りにつくようにしていたのだが、それでも妻はある夜ひどい鼻風邪をひいて咳が止まらなくなり三八度の熱を発して勤めを休んだ。

こうなっては仕方がない。鼻にハンカチを当てて氣息奄々と寝ている妻にぼくは、「夏の間だけ隣りの部屋で寝ることにするからね」と宣言し、八畳の和室に薄い布団を敷いて、さて、盛大に東と南の窓を開け放ったものだ。

三階だから風がスースーと通って実によい気持ちである。外からの目を気にする必要もない。大の字になって目をつむり、若いころ、はじめて下宿をした時に感じた解放感をひさしぶりに思い出しながら眠りに入った。

この和室はもともと寝室ではないから厚いカーテンで部屋を暗くしてあるわけでもなく、四時半には白々と薄明が窓に

訪れ、小鳥たちがやがて昇ろうとする朝日の気配に感じて啼き始める。このめざめがまたたまらない。高校生のころに、家の者がまだ寝ているうちに起き出して勉強部屋の窓を開け放ち、流れ込んでくる夏の朝の空気を一杯に吸い込んでからポリウムを絞ったオンボロラジオのスイッチを入れ、たとえばグリーングの「朝」やヴィヴァルディの「四季」を聴いていたあのしびれるような幸福感をまた思い出した。

ぼくはむしろように音楽が聴きたくなった。そこで、五年前に慶応病院に入院した時に買ったソニーの携帯用小型CDプレーヤーをひさしぶりに枕もとに置き、さて、と考えて、鮫島有美子の唱歌・童謡集をセットした。

「みかんの花が咲いていた 思い出の道 丘の道……」

イヤホンで聴いていると子どもころの心の雰囲気がよみがえって甘い気持ちになってくる。その一方で、五年前、手術をひかえたベッド、手術を終えたベッドでおれは、パーバラ・ポニーやレナータ・テバルディやアグネス・バルツァをこのプレーヤーであきもせず聴いていたのだったなあと思った。なぜ女声のものばかり、ああした時に、そして今も、

おれは聴きたがるのかなあと、そんなことを思つて半醒半睡の境に遊んでいるうちに、ぼくは又寝入った。肌をなせる朝の風、雉鳩のポーポー鳴く声……。

と、そんなことを始めてから二、三日たった先日の朝、まだ暗い三時半ころに階下（二階）で何やらゴトゴトと音がする。ぼくの家は一階が塾の教室、二階が母の部屋とダイニング・キッチン、三階がぼくたち夫婦の居室と寝室になつていゝのだが、ああ、母がトイレにでも起きたのだらうと気にもしないであつたらうつらしていたら、なおも音がする。おや、どうかしたのかなとようやく心配になり、降りてみようかと思つてふと見ると、開け放したままの部屋の戸の向こう、二階からの階段を上がりきつたところに黒い影がある。おどろいて「お母さん、どうかしたの」と立つて行くと、「赤ちゃんをお風呂に入れてよと思つただけど、お風呂場がみつからないの」とぼんやり言う。見れば、枕を、ちようど赤ん坊を抱くように腕にかかえている。ぼくはドキツとした。

「お母さん、それは枕だよ。赤ちゃんじゃないよ。枕だよ」
すると母は、「ウン、枕だということとはわかつただけど、自分の部屋がわからなくなつたの。もどれないの」という。

「しようがないなあ。ねほけちゃつて」

そう言いながら母を階下へと導こうとすると、階段をおぼつかない足取りでおりながら、「この階段、うちの階段と同じだよねえ」と不思議そうにつぶやく。ぼくは又ドキツとして、

「うちの階段と同じ、じゃなくて、これはうちの階段！ しつかりしてよ、お母さん」と少し強い口調で言いながら二階までおろし、それから、母の頭の中の迷妄の霧にひとつひとつあかりをとますように、廊下、ダイニング・キッチンと次々電氣をつけていった。

「お風呂場はここですよ」と風呂場の電氣もつけた。

「この入口がしまつていてわからなかつたんだ」

なおもぼんやりと言う母を部屋に連れて行き寝かせようとすると、なおも腕に抱いていた枕を、「じゃあ、ここに寝かせよ」と、まるで赤ん坊をベッドに寝かせるようにそつと、しかも、これから添い寝をしようとするかのように、通常枕を置く位置ではなく、たてに置いた。

「お母さん、それは赤ちゃんじゃない。枕だよ」

ぼくは身の内に迫り上がってくる怯えを感じながらまた強く言つた。すると母は、「うん、わかつてる。これは枕だよ。ね。赤ちゃんじゃないよね」と不思議そうにしながら、こんなことを訴えるように言つた。

「美淑（みよ）ちゃん（母の姪である）の夢を見ていて、目がさめたら横に赤ちゃんが寝ているから、お風呂に入れてあげましようと思つて抱いていったんだけど、お風呂がどこかわからなくてうろろろしていたの。そしたら上の部屋でヒテオさんの咳がきこえたので、（情けないことに、実はそのとき、年甲斐もない連夜の窓開け放し快眠法が裏目に出て、ぼくもゴホゴホひど

い咳に見舞われていたのだ)、ああ、と目がさめたんだけど、こんどは自分の部屋がどこかわからなくなっちゃったの」

「どうやら母は半分はめざめ、半分はなおも幻覚にとらえられた状態で、心筋梗塞に倒れる一年前までは自分の居室のあった三階へと、ぼんやり、枕を抱いて、あがつてきたということだったのだろう。」

「でも、もう大丈夫。目がさめたから。すいません。ごめんなさい。こんな夜中に」

「そう言いながら「今、何時?」ときく。」

「もう四時。もうすぐ夜が明けるからね。台風もたいしたことなくさそうだし、大丈夫だからね」と言い、「電気、どうする?」ときくと、「一番小さいのだけつけておいて」と言う。

「じゃあ、ぼくは上にいるから。何かあったら枕もとの非常用プザーを押してね」と声をかけ、蛍光灯を赤い小さな非常灯だけにして部屋を出ようとすると、母が寢床に仰臥した姿勢のまま、「バイバイ」と手をふった。

三階にあがつたものの、もう眠れない。

バイバイ、か。

外は台風が近づいているらしく南面いつぱいの窓ガラスに風と雨が激しい音を立て、時にどつと吹き寄せる風に、鉄骨三階建ての家がゆらつと揺れる。

バイバイ、か。

枕を抱えてぼんやりと階段の暗がり立っていた母の姿が

念頭にまつわりついて去ろうとしない。ぼくは枕もとのプレーヤーに「鮫島有美子ロシア民謡をうたう」をセットしイヤホーンを耳に押し込み、はじめの数曲はとぼして「青いプラトック」にいきなりすがりつくようにした。

プリーモ・レーヴィ「休戦」を原作としたフランチェスコ・ロージの映画『遙かなる帰郷』の中で、ロシアの妖艶な娘によって歌われたその曲をこのごろぼくはしばしば聴く。その曲のたたえる寂しいような甘いような憂愁が、自分の心の底にひそむ何かを懐かしくよみがえらせるよさなのだ。

「おぼえてるよ今も 最後のあの夜 君の白いうなじ すべり落ちた 青いプラトック 今遠く 遠くはなれても 残り香に君を偲ぶ この青いプラトック」

ああ、こういう内容の歌だったのかと、その朝、ぼくははじめに歌詞を意識して聴いた。

頭蓋の中に響くロシア民謡。何か心の底にしきりに動くものがあつた。

やがてぼくは夢を見ていた。教師になりたてのころ、文化祭で子どもたちと上演したシユプレヒコル『空の勇者リンドバグ』(フレイト原作・栗原一登脚本)の舞台。すでに幕があがっているのにセリフがどうしても思い出せない。ぼくは脚本集の目次にしたがって⁴⁶¹頁を必死にさがすのだがそこだけ落丁で肝腎のセリフをどうしてもたずねあてることができない。

もがき、あせりながら夢からさめると、イヤホーンはいつか耳からはずれ、階下では母が洗濯機を回しているらしい音がする。台風の風雨もどうやらおさまったらしい。時計を見ると六時半。起きて下におりると、母が顔を洗っている。洗濯機は水が出しつ放しのまま回っている。

「お母さん、具合はどう？」とたずねると、「ああ、もう大丈夫。ゆうべはすいませんでした。でも、こわいねえ。ヒデオさんが上で咳をしなかったら、あたし、あのまま枕をかかえて外へ出て行って、あの○○さんのように、帰ってこられなかったかもしれないだからねえ、こわいねえ」としきりに言うのではくは「としをとればそういうことはあるさ」と慰め、それから、「お母さん、洗剤を入れたまま水を出しつ放しにして回したらみんな流れてしまうでしょう。すすぎじゃないんだからね」と水道をとめた。

「ああ、又、失敗しちゃった。しょうがないねえ。トシをとると」

そう言って笑う母が、しかしすっかりふだんにもどつたシヤキツとした顔になつていますはほつと息をついた。

「何かあつたの？」と妻が起きてきた。「今日は第二土曜で休みなのにずいぶん早いから」

すると隣から母の呼ぶ声がある。

「ヒデオさん。ちよつと来てみて。雨が漏つてるみたい」
ぼくは妻に「うん、ちよつとね。あとで話すよ」と言つて

から隣の部屋に行つてみると、西の窓のサッシからポタポタと水がたれていて、「あとで工務店のK君に来てもらうよ」と雑巾を置いて応急の処置をしながら、(やれやれ、いろんなことがつぎからつぎへとおこるなあ。孫の翔太につづいて玲子も風邪をひいたというし)とため息をついたが、どうやらぼくは、心の底のどこかでそうしたあれこれをおもしろがつていような気配も感じていたのだった。

C市の公民館で〈古い〉をテーマとする文学講座四回を終えたばかりだった。「恍惚の人」(有吉佐和子)「黄落」(佐江衆一)「癩癩老人日記」(谷崎潤一郎)「山の音」(川端康成)「天井から降る哀しい音」(耕治人)「白髪の唄」(古井由吉)といった作品を読みながら、ぼくはつくづくくと、(生老病死)とは、画然と区切られた段階あるいは層を意味するのではなく、生と老と病と死の各層がさまざまなかたちで相互に浸透し合うものであるとの感慨を抱くようになっていた。一つだけ例示すれば、古井由吉は、生々しい鮭の香りが通夜の席の線香の匂いの底から立つというかたち——生と死の稠い合わさつた独特の感触から長篇『白髪の唄』を書き起こしていたし、その冒頭の章にはまた、若く豊かな黒髪をそなえた青年が、交通事故で入院した病院の深夜の喫煙室で、逆光の中、一瞬白髪の男であるかのように見る者に錯視を惹起するというエピソードを通じて、生と老の同時併存・相互浸透という小説のテーマにかかわる中心的イメージを早くも読む者の心

に刻印してもいた。

谷崎や川端、その他の作家のどの作品においても、〈古い〉は枯れた、静温なもの、限りなく〈自然〉に回帰していく生の終焉の相・姿といった静的なものではなく、もっと生々しい、端倪すべからざる動きを孕んだものとして追求されていた。

〈古い〉において、むしろ〈生〉は白熱する――。

ぼくはそう思うにいたっていたのだが、枕を赤ん坊のように抱いてこれを風呂に入れようとした晝闇の中の母のふるまいの底に、ぼくは、母の生の白熱化した様相を垣間見たように思ったのである。

「生老病死という言葉に、私は、そのいずれのフェーズ（相）にも浸透して生動する広義の〈狂〉という要素を含めさせ、〈生老病死・狂〉の姿をこそ人間まるごとの実存の姿としてイメージしたいような心境に立ち至りました」

講座の最後に、ぼくは思いついてそんな生煮えの感想を吐いたのだが、以後、ひよいと浮かんだアブクのようなその想念は、しかし、それ以後、ぼくの内部で、ゆつくりと思いがけない育ち方をし始めたようでもあるのだ。

母はその日も、迎えにきてくれるティ・ケアのマイクロバスを二階の部屋の窓際に椅子を置いて待ち受けた。

「お母さん、またおむかえの時間まで、ずいぶん間があるでしょうに」とからかうと、母は、「まだ早いけどねえ。でもお

むかえがきたときにあわてるのがいやだからこうして早くから待っているの」と笑った。

やがてマイクロバスがやってきたらしく、「ヒデオさん、おむかえがきましたよ」と母の声が玄関でする。三階で新聞を読んでいたぼくは急いで下におりた。母は若いスタツフに手をひかれ、外階段をおりていくところ。

「ゆうべ、あたし、ねほけちやつてねえ。枕を赤ちゃんとまちがえてお風呂に入れようとしたのよ」

母が白衣の青年にケラケラ笑いながら話している。

「枕をですかあ」

青年も笑っている。

足置き台にゆつくりと足をのせ、母がバスに乗り込んだ。

「それでは行って参ります」と若いスタツフが頭をさげる。

「よろしくお願いします」とぼくは、ドライバーのかたにも頭をさげた。

すぐにドアが音をたててしめられ、バスが動きはじめた。席についた母は、いつものようにニコニコ笑いながらこちらに手をふり、軽くうなづくようにする。

バイバイ。

だが、声は、しめた窓のむこうから聞こえない。バイバイ。心につぶやきながらぼくも小さく手を振り、バスが角を曲がるのを見届けてからゆつくりと階段をのぼった。

（ただけ・ひでお 霞塾主宰）

不機嫌な装置（下）

竹信 三恵子

八〇年代の専業主婦たちは、すでに「近代化の旗手」としての輝きを失い、アンペイドワークを処理する装置としての政策担当者の期待ばかりが誇大にはりつけられた存在に転化していた、と前回書いた。

この時期の女性たちについて、今年六月に出版された『専業主婦』で幸福になる方法——あなたが知らない危機を乗りきるサバイバル術（洋泉社ムック）は、編集部による巻頭文の中で、的確に表現している。

「私たち（大きっぱだが昭和三十年代後半の高度成長の申し子たち。自分の欲望に正直なのがとりえ）してみれば、『専業主婦』って損な感じはしなかった。夫も子どもももちたい。ゆとりのある生活もしたい。だつたら……『キヤリアも捨てがたいけど仕事だけっていうのも寂しいモンがあるし、いいじゃない、本人が幸せなら』。専業主婦は女の生き方として、たしかにうれしい選択のひとつだった」

●恩恵をこうむれない層

しかし、専業主婦温存というアンペイドワーク政策に誘い込まれる女性のかげで、その恩恵をこうむれない層も静かに増えていた。非婚や離婚の男女、夫が妻を養えるほどの稼ぎのない共働き家庭、などだ。不況の九〇年代に入ってこうした層は顕在化し、専業主婦への風当たりは急速に強まった。それに伴い「専業主婦の不機嫌」も高まることになった。

風当たりが強まった原因としては、ざっと次の三点があげられる。

①配偶者控除や年金など、他の層が拠出している公的資金を専業主婦家庭に注ぎ込んで、専業主婦を維持しようとするこゝへの疑問の表面化、②九〇年代後半に強まったリストラや財政難で、専業主婦を温存しにくくなった男性側の疲労感、③専業主婦の存在によって逆に女性全体のアンペイドワークが見えなくさせられていることに対する働く女性からの不満。

①については、ここの二、三年の間に、各紙に論争や記事が相次いで掲載されるようになり、厚生省の年金制度改革の柱のひとつにまでなつたので、ここではアンペイドワーク政策との関連についてだけ、ふれておこう。

八五年の年金制度大改正に伴う第三号被保険者制度と、八七年の配偶者特別控除の創設は、当初から、女性の間には衝撃と反発を巻き起こした。税理士の山崎久民さんは四月に出版した「税理士が見たジェンダー」(ユック舎)で、次のように回想している。「配偶者特別控除」の導入を、私は新聞で知つた。一九八七年、あの日の朝の衝撃は今でも忘れられない。(中略)『こんな、ばかなことが。どうして?』と、ごちゃごちゃ興奮して一人でしゃべっている私を、何ごとが起きたのかわからない夫は啞然として見ていた」。

山崎さんが「ばかなこと」とつぶやいたのは、①「内助の功」の評価(本来はアンペイドワークの評価というべきか)の成果が、夫への控除という形で夫になつてしまふ、当事者の女性のものにはならないこと、②夫が勤め人かどうか(すなわち、夫の身分)で決まってしまうこと、③夫の扶養に入っていない女性はどうなるに重い子育てや家事をしていようが対象にならないこと、などによる。さらに、最大の問題は、こうした一種の「補助金」に

よつて、女性が夫の扶養を離れることが難しくなることである。

全国婦人税理士連盟(現在は全国女性税理士連盟)は、これに先立つ八六年十月に「税制に関する要望書」を政府に提出、メンバ―の遠藤みちさんらは、新聞各社に要望書を記事にするよう働きかけて回つていた。

要望書は、家事労働は専業主婦だけが担っているわけではなく、「共稼ぎの主婦、寡婦の多く」(要望書の原文通り)も行っている、と指摘。専業主婦だけに「内助の功」を認めれば、専業主婦、働く女性、独身女性の三者の間に新しい不公平を招き、女性の社会進出や経済的自立を妨げかねない、と批判した。

●「貧」から「富」への移転

配偶者特別控除新設の直接的な動機は、実は消費税導入にあった。自営業の主婦には収入から給料分が分割され、その分、税が軽くなるのに、勤め人は丸ごと課税されてしまうという不満を背景に、勤め人に配慮した制度改正を抱き合わせて新税への賛同を得ようというのである。標的は飽くまで夫だった。

「新フェミニニスト経済学」の著者でアンペイドワーク研究の専門家、マリリン・ウォーリングさんが来日の際、

このシステムについて聞き、「妻の無償労働で夫がもうけるなんて、奴隷労働の搾取と同じでは」と声を震わせたことを今も思い出す。妻のアンペイドワーク評価が夫の身分で決まるという点で、女性にとつては屈辱的な制度であった。

しかも、日本では女性の賃金水準は男性に比べて極端に低い。正社員の女性は男性の七割近くに上昇したとはいえものの、女性労働の四割は安いパート労働だ。これを含めた全平均では、女性は男性の半分という数字もある。こうした中で配偶者控除や第三号被保険者制度を導入すれば、最悪の場合、賃金の低いシングルマザーが厚生年金の保険料や税金を払い、この拠出による財源から、妻一人を養える程度には豊かな片働き家庭の男性に「補助金」を出す、という形にもなる。「貧」から「富」への所得移転である。

加えて、せっかく妻が自分の収入を抑えて夫の手取りを増やしても、離婚してしまえば、すべては夫のものなのだ。

一見、アンペイドワーク保障にみえる一連の政策は、「専業主婦を維持するために『夫に』給付される補助金」であるばかりか、女性や独身男性からの「搾取」にも転化しかねない要素をはらんでいたのである。

主婦たちが「自分で主婦の道を選んだ」と胸を張ろうとすると、「あなたが選ばなければ選ぶほど私たちの負担が増える」との反発が共働きや独身の男女から出る。そんな暗闘が出てくる一方で、「主婦優遇は当然」の意識も広がっていた。

第三号被保険者制度ができる前、専業主婦は、四分の三が国民年金を自力で払っていたといわれる。しかし、その後、自分の母たちが自力で払っていたことさえ知らない主婦新世代が次々生まれていたのである。

夫婦別姓に関心を持つ三十代の専業主婦は、大学の女性学講座もとり、女性の自立にきわめて前向きに見えた。しかし、経済的自立の問題に話題が及ぶや、「夫が死んだら、失業したりなんて、私は考えられません」と、判断停止の状態になった。

「在宅ワークをしているが生計は夫が支えている」という別の三十代の女性は、主婦の無償労働の現状について分厚い論考を送ってくれた。参考文献を多数読み、主婦の悩みや問題点を懸命にあげているのに、脱出方法については、なかなか出て来ない。そういうと、「母は父の転勤で仕事をやめました。主婦を抜け出すなんて無理ですよ」と彼女はいった。

「私は夫が海外に出たとき三年間子どもを抱えて別居し

て働き続けましたよ。絶対に無理とはいえないんじゃないですか」と、つい反論すると、口をつぐんだ。その様子は、自分が置かれた不愉快な状況から抜け出す道を求めて女性学を学んでいるというより、夫の経済力に「庇護」されざるをえない必然性を立証することで、現状維持を続ける自分を正当化しようとしているようにもみえた。

四十代の男性は、妻に家事を手伝ってほしい、といわれ、「専業主婦の君の役目だろう」と答えた。すると、「あなたたちオヤジのせいだ、主婦が再就職もできない社会になった。家事ぐらい分担してよ」と責められた、という。

装置としての主婦が、爛熟の域に達したところへやってきたのが、九〇年代不況とリストラだった。

● いら立つ妻と疲れた夫

夫たちからは、愚痴めいた打ち明け話が、ちらほら聞かれるようになっていた。

四十代後半の会社員男性は「かみさんに働いたら、と勧めても、いまさら馬鹿馬鹿しい。あなたが働くといっただから私は主婦を引きうけたんじゃないの、といわれた」といった。

三十代の男性会社員は「いまの理想の花嫁候補は音楽大学出」と冗談まじりでいった。音大はお金がかかるから親は金持ち。いざ解雇されても、妻の実家が面倒を見てくれるし、妻は音楽という技能があるから稼いでもくれる、というのである。

何重もの「保護策」に囲まれ、現状から抜け出せないといらだつ妻と、リストラや賃金カットの中で、家族を背負って働き続けることに疲れを感じ、役割を一部分担、または交代してほしい、と感じる夫とのねじれが目立ち始めているのは確かなようだった。

財源難に苦しむ行政担当者の間からも、主婦年金などの制度を見なおしたいという声が、ときどき聞こえるようになった。

女性の被保険者に占める第三号被保険者の割合は、九九年三月末に過去最低の三三％に落ち込んだ。夫が失業で働き続ける女性が増えたこともあったが、夫がリストラなどで勤め人の位置から外れ、自営業などに転じたことも大きいと日本経済新聞は報じた（二〇〇〇年五月九日付）。

夫の身分に左右される「内助の功」評価のもろさを、象徴する出来事だった。

（たけのぶ・みえこ 新聞記者）

宮台真司の世紀末講座

番外編―近代とは何か

まとめ・稲邑恭子

モダン（近代）とは何か

稲邑 『宮台真司』をぶつとばせ』

（諸富祥彦編著・星雲社）では、宮台さんを近代主義者なのにポストモダン主義者で矛盾していると批判しています。

宮台 ほんとうは矛盾していないんですよ。

稲邑 でも、宮台さんの書かれるものは文脈から切り離すと矛盾しているように聞こえることがありますか。

宮台 彼等の場合は単に無知だと思いません。思想史を知っていたり、ものを深く考えてきている人間であれば僕の言っていることの一貫性はすぐ見つけられると思います。

「モダン（近代）とは何か」という

定義は、「産業化」、「市民形成」、「機能分化」など、いろいろありますが、

最先端の「社会システム論」の立場では、「モダン」を「産業化」という意味では捉えないし、さらに「主体形成」・「市民形成」という意味でも捉えません。三番目の「機能分化」という意味で捉えるんです。つまり、政治も経済も宗教も文化も教育も、要するに多元的な価値が交錯し、それぞれの多元的価値に基づくコミュニケーションが階層的な序列なしに相互いを主張しあったりお互いを呑み込みあったりする社会が「モダン」といえるのです。

そして、そういう複数のサブシステムに通り一遍関与するためには、「主体」というものが必要だと考えら

れていたわけです。

前近代の社会では、大工は一生大工、鍛冶屋は一生鍛冶屋で、政治的な権力者が同時に経済も愛情も独占する社会でした。ですから、末端にいる人間から見れば、いろいろなものに自由に関与する必要がなかったの、「主体」、つまり「選択する力」というものは必要なかったのです。その「主体形成」というものが必要になるのが、近代のひとつの指標です。

そしてまた、マックスウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」にその萌芽があるのですが、資本主義を立ち上げるのに必要だったもの、具体的に言えば伝統社会のふるまいの作法、身体

の作法やこのころの作法を切り離すために必要だったさまざまな立ち上げ期の装置は、いったんシステムが円滑に回るようになれば必要でなくなってくる。近代立ち上げ期に必要な「主体としての能力」すなわち「選択する力」も必要がなくなっていくんです。

モダンとポストモダンの違い

ポストモダンは広い意味では近代の一種です。元々「ポスト」というのは、2種類あって、ある実態があり、そのまた後をポストという場合もあれば、ある実態を前半と後半に分けて後半をポストという言い方もありますが、社会科学では、ポストモダンというのはモダンの後にくるものではなくて、モダンの中の後期ないし末期という捉え方です。僕はモダンは近代過渡期、ポストモダンは近代成熟期と呼んでいます。

社会のシステムを見た場合、「モダ

ン」と「ポストモダン」にはさしたる違いはありません。同じように機能分化した社会であり民主制も市場システムも同じように存在しています。しいて違いを言うならば、不透明さが増大するという一点につきるわけで、僕はそのことを「成熟社会」と呼んでいます。

まあ何がよきことか、何が人間の目的であるかについて、言及するところが難しくあるいは必要がなくなるということなんです。不透明であるがゆえにそういうものをも見通そうとする目標や努力はコストばかりかかって、実りが少なくなってくる。そのときに、ひとつの適応行動として「意味から強度へ」という動きが出てきたり、これは一般的には「消費化」ということですが、モノを生産する時に必要だった目的指向性や集団規律よりも、拡大した消費時間を愉しく過ごす、「いま」「ここ」を愉しむタイプの生き方がどんどん重要にな

ってくるわけです。

これは三〇年以上前から、社会学や人文科学では「インストルメンタルなものからコンサマトリーなもの」へと、あるいは「インストルメンタルなものからコミュニケーション」へ、「コントロールからコミュニケーション」へといろんな言い方で予言されていた動きですが、それをふまえたときにねじれが出てきます。

それはどういうことかと言うと、たとえば、「意味から強度へ」という流れに自らの身を任せようとする人間たちは、それでもなお「意味」を使わざるを得ない。「意味から強度へ」というメッセージをも「意味」的に解釈して、出発点においては「意味」を使って自分を開いていかねばならない。

「人間は体をもつと尊重しなければならぬ。頭でつかちではいけない」と言うとうしますよね。しかし、そう

読んでいるのは、頭でつかちな人間が読む本です。あるいは自己決定しろと言う人間の言うことを聞いて自己決定する場合は自己決定と言えるのか、あるいはもつと一般的に言えば、選択は嫌だ、適当にやっつけていきたいというのも実は選択なんです。選択を放棄するのも選択、自由を放棄するのも選択になるし、そういう逆説に満ち満ちている。

実は、ポストモダンということを言い出したヨーロッパの学者連中は、もちろんそういうことはわかっています、マルクス主義の二段階革命論に似ているんですけど、モダンが徹底することによってポストモダンになると言う。つまり、ラディカルな近代主義者でなければポストモダン主義者にはなれないということですよ。

ですから、僕が書いているものの中には前期近代と後期近代と共通する、近代化に必要なものが一方では書かれています、前期近代が終わ

つたので前期近代に必要な方法から後期近代に必要な作法にシフトすべきという主張も同時に存在しているということですよ。

「機能分化」を達成させるための方法論

さきほどの、モダンの定義に戻りますが、なぜ最先端の社会システム理論で「機能化」をモダンの定義にするかと言うと、一番目の「産業化」を指標にすれば、社会主義社会も近代に含まれてしまうことになります。また、二番目の「市民形成」をとれば、日本は近代とは言えません。欧米とは違って自立的に選ぶ主体が存在しないからです。もし、この「市民形成」をもって近代化の指標とすると、西欧やアメリカ以外の国は近代化できないことになってしまうので、概念的に狭すぎる、あるいはあまりにも文化的にローカルな概念であることになります。それで、その

中間にあつて、使いやすい分析概念をと考えると、三番目の「機能化」の定義がいいのです。

宗教的あるいは政治的権威が社会を覆いつくしているという社会ではない、ある程度風通しのいいバランスな社会が「機能分化」された社会であり、この指標で見ると、日本は近代と言えます。

そして、この「機能分化」を達成するための方法論がそれぞれの社会で違ってくるということになります。欧米のように個人間のルールというコミュニケーションを使う場合もあれば、日本のように集団間の共生の原理を使うこともある。

日本は「近代化」はしているが、「市民社会化」はしていません。その意味で前近代（プレモダン）でありながら、あたかも「近代」（モダン）を達成しているように見えるのです。

ポストモダンに行くための モダンの徹底

ただここで問題になるのは、内部道徳と外部道徳が分化しているような旧来の共同体社会を、もはや私たちが維持できなくなってきたということです。

理由はいろいろありますが、ひとつは第三次産業化、あるいはものの豊かさが一定程度達成されて、さまざまな目標や価値が分化してきて、社会流動性が高まってくる。

さまざまなことがからんでいるのですが、要するに個人が自らが属するローカルな共同体に同調を強いられたい甘んじて同調してしまっているという状況そのものがきわめて当人とつても社会にとつてもコストばかりかかって良いことがないという、そういう状況になっているのです。

日本の場合、後期近代に行くためのモダンのための徹底のために、日本が前期近代までやってきた、集

団同調的な共同体的メンタリティを持つていた人間たちによって交渉事やルールが共同体間の手打ちとして行われていたような旧来のシステムを別のものに取り替えることが必要になります。それは簡単に言えば、ルールは「個人」が従う、あるいは強制は「個人」が強制するというかたちに組み替えるしかない。

ただその場合に当たり前ですが、西欧やアメリカが運用してきたような宗教社会的条件に裏打ちされた個人主義は使えません。僕が主張しているのは西欧的な個人主義ではないんです。そういうことを日本で主張しても五〇〇年千年規模では意味があるかもしれないが、当座、近代過渡期から成熟期に向かうべき作業があるというときのタイムスパンとは決定的に違っているのです。

稲邑 それはどういうこと？

宮台 たとえばそれはね、「多元的所属」というのがひとつのヒントにな

るわけです。たとえばストリートに
いる連中が携帯情報機器を使つて、
いろんな所に仲間集団を作る。携帯
情報機器はそれを通じてつくりあげ
られた人間関係を維持するのに楽な
んです。メインテナンスコストが低
い。年賀状をやりとりしていれば関
係がつながると同じような感じで、
ときどきベル入れたりすれば、会わ
なくても関係が続く。そうして若い
連中は共同体的な所属を多元化・蛸
足化しています。

もちろん彼等は個人主義者ではな
くて、ある意味では共同体主義者で
メンタリティは昔と変わらない。仲
間といなければ寂しいし、もしただ
一つの共同体にしか所属していない
としたら、同調圧力に負けるわけ
です。その意味では何の変化もないが、
形式的には大きな変化がある。

それが多元的所属・蛸足化なんで
すね。そうすると、一つの集団で同
調圧力があつてそれが端的に不快な

ものであれば、同調しないで集団所属を切り捨てることができる。そのような多元的所属をしているような共同体主義者がこれから増えていくと思っんです。

僕が共同体主義と言うのは、イデオロギーの問題ではなくふるまいの作法、形のことを言っています。そうすると、全体としては同調圧力に負ける人間がどんどん少なくなってくるわけです。

企業の経営者からみれば、言うことを聞かない従業員が増えるし、いわゆる共同体的道徳主義者から見れば、共同体的道徳の外側を生きている連中が増える。それを多くの人間は「個人主義化」と誤って言っていますが、それはいままでのような欧米の個人主義を意味しているのではないのです。

稲邑 自我が強靱なわけではない？
宮台 状況依存的な私たちで、つまり、たまたま蛸足化しているから同

調圧力に負けないで済んでいるということですよ。しかし少なくとも過渡期的にはそれで十分です。僕がフィールドワークで観察できる若い連中を見ても、同調圧力に負けていない、自由だし強く「見える」、もちろんそのように「見える」だけで十分です。しかしながらいわゆるルール、「個人」と「個人」の間の共生を意味するルールだというふうには言い切れない。すなわち、「島宇宙」化した様々なローカルな共同体がいっぱい存在していて、多くの人間が複数の共同体に所属しているときに、その共生の条件は、もともとは共同体的な人間の集まりですから、おそらく小集団間の共生、小集団は以前よりもっと小規模に流動的になっていますが、そういうかたちでおそらく考えなければならぬだろうと。

共生のルール

そうではあるんだけど、それと

同時に、原則的な問題に遡る必要が出てきます。以前人を殺さない理由についてお話をさせていた。たまたまけれど（We九八年八月号）、個人主義者であれ、個人主義者でなかれ、何でもいいんですが、共生を脅かすふるまいにもいろんなレベルがあります。とりあえずすべてのレベルを一括して考える必要はないと思います。道路交通法的なのは破るやつはいるとしても、人は絶対に殺せないという水準のふるまいの作法は基本的に習得してもらおう。それを備えて生きるためには学校教育がかなり有効です。

その意味で言えば、道路交通法的レベルでのルールがこれから難しくなっていくでしょう。法律の中にはそれを侵害することが直ちに人権を侵害する類の逸脱行為でないものがある。たとえば、右側通行か左側通行かという問題がそうです。そうは言っても、人々が右を走つてるときに

左を走るとえらく交通の流れに問題を
生じ危険なことになるのですが、
こういういうタイプのものを守つて
もらうことはなかなかむずかしくな
る。それについては別の処方箋を用
意しないといけないでしょう。その
へんをまず分ける必要があります。

ですから、僕が学校教育の中で、
「承認」と言っている問題は、基本
な「共生可能性」に関わる感受性を
どうやって育てるのかにかかつてい
ることになるし、「試行錯誤学習の推
奨」は、普通に生きていくためには
結構些細なことであるいろいろ取り組み
をしないとうまくいかない部分もあ
るのでそれを学ぶためにやります。
そのあたりは分けた方がいいという
ことです。もちろん試行錯誤ができ
るだけのある種の強靱さを養うため
には、基本的な部分で他人との社会
的な交流において「承認」される必
要があるという、そういう連関はあ
ります。

稲邑 学校教育でそれらをやれると
したら？

宮台 それはスウェーデンを見ても
アメリカのチャータースクールを見
てもいろんなやりかたがなされてい
ます。とにかく一斉カリキュラムを
やめることです。年齢別発達課題と
いう考え方もやめる。課題があると
すれば、その人間それぞれにあるわ
けだし、課題を達成しようとする力
は「承認」を通じてある種の自尊心
の形成によつて可能になる。

ただそのお仕着せでなく自分で選
ばせるようにするのを「一斉に」や
つてしまえば、当然、それから落ち
こぼれてますますマイナスの自己イ
メージを強化されてしまう人間も出
てきてしまうので、そこはソフトラ
ンディングが必要なんです。そして
そのソフトランディングは、ある程
度危険を緩和された状況を合法的に
作るか空間的に作るかいろんなやり
方があると思うけど、しかし全く危

険を排除すると試行錯誤にならない
んで、そこはむずかしいところです。

ひとつは、過渡期ですから上の世
代の生き方から作法を学べない。上
世代の「バカ」がうつらないシステ
ムと同世代あるいは近隣世代のモデ
ル学習を進められるような、「あの子
が私の本になるかも知れない」と
いう、そういう意味でのコミュニケ
ーションの流動性が重要です。クラ
スの中だけでモデル学習の対象を見
つけることは難しいので、そういう
人間を目標できるチャンスを用意す
る。近隣の世代を対象に真っ先に考
えるべきでしょう。欧米の多くの学
校でやっているように、地域の面白
い人と呼んできて、さまざま実技
系の授業などを通じて、「この人間面
白いな」、「こういう生き方がいいな」
という参照ができるチャンスを増や
していけます。これは他の国ではや
っているんです。

女たちは割烹着姿で

後方支援

木村 民子

99年3月の予算委員会の委員は今、回共産党が女性議員を全員送り込み、わが会派からも私が出たので、珍しく色鮮やかな顔ぶれとなった。この女性議員、連合ではないけれど、それぞれが、事細かに問題点を突つてくので理事者側はうんざり、げんなりした様子。その理事者側といえは相変わらず、男性ばかり。委員会は区長以下、部課長級が勢ぞろいするが、予算委員会は審議される内容によって係長や主任なども待機しているの、時には百人ぐらい居並ぶ。彼らが分厚い風呂敷包みや大きな手

提げを抱えて、緊張した面持ちでそろそろと入室し、入れ替わったりするのを見るのは、壮観である（と云えるようになった、私も余裕だね）。

が、女性職員はまだまだ少ない。わが区は幹部職員80名余りで、女性課長などは8人しかない。こういう場に出てくれば鍛えられるし、議員の（不）勉強ぶりもわかるというもの。何よりも、区民の代表である議員と行政のやりとりの中で、区の予算の少なくとも何が問題になるか把握できると思う。それを知ることが日々の業務で役立つだろうし、次の予算編成の時に、もつと区民に直結した事業や政策立案ができるかもしれない。

私も議員になって、こういう場に出る機会を得たことで、恐る恐るではあるけれど、発言したことの重みを感じたり、認識不足を嘆いて奮起しているのだ。だから、女性の職員

たちにもつともつとこういう場で研鑽を積んで欲しいのだけれど。先輩議員に聞くと、前はお茶汲みの女性があひつきりなしにお茶をついでいたとか。さすがに、女性職員のお茶汲みはなくなつて、欲しい人が自分で注ぎにいつたり、急須を回すようにはなつたが。

さて、この予算委員会でやりだまにあがつたのが、近く行われる公会堂の落成式の受付けに女性職員のみを配置したこと。庁内からも「なぜ女性たちばかり受付けに？」という声があがつたそうで、共産党の女性議員の一人が問題にした。私の質問の番ではなかつたので、私は黙つて聞いていたけれど、担当部長の答弁を聞いて、「これはひと言言いわなくちゃ」とカツカしてしまつた。

彼が言うには、「華やかな式典での受付けのような業務には、女性が向

いており、私のような男が立ちましても、お客様には失礼かと存じます。これは社会通念としても、女性がそのような役割を期待されていることは否定できず：」

私が挙手してようやく指名された時に、これを蒸し返し「さきほどの部長の答弁は納得がいきません。社会通念に従って受付け業務は女性という配置をしたのであれば、性別役割分担を区が社会的に認めたということにはかならず、男女共同参画社会基本法の理念にも沿っていない。区が率先して積極的に改善すべきことを区民が多く集まる式典で唯々諾々として行うというのは、やはり問題ではないでしょうか」とまくしたてた。

しかし、当日、問題はこの受付だけではなかったのだ。

式典の壇上にあがった人々を見て何か釈然としないものを感じた。20

人近くの区の要職者・来賓の中で女性はずか3人しかいなかったからだ。しかも、その内2人は「ご主人」の代理でいらした〇〇夫人たち。

そういえば、消防署の功労者表彰式でも、永年の「内助の功」として〇〇夫人たちが特別に表彰されており、唾然としたものだったが。

このように区の関連行事として行う式典などで、時代が逆戻りしているような錯覚にしばしば捕らわれる。

ある花祭りの開会式で裏方として働いている町会婦人部の女性たちが、お揃いの真っ白な割烹着（エプロンではなくカッポー着）を着ていたのを見たときの違和感と情けなさ、憤り。性別役割分業意識の下で、女性が裏の仕事に回され、式典で挨拶するのは男ばかりという構図はやはり、おかしい。男の人たちも、テントを張ったり、力仕事で裏方をしていたかもしれない。それでも、その男性た

ちは乾杯やらパーティーのときは、一緒に飲み食いしていたものね。

当の婦人たちはいそいそとかいがいしく、お酒をつぎまわっている。女にお酌させていやねとまで言うつもりはない。私だって乾杯のときにそばにビールがあれば、どうぞと差し出す。だけれどね、下働きの女たちは、そのハレの場に一緒に会食したり、歓談してはいけなのか。議員として来賓扱いされている私は、同じ女として居心地が悪い。割烹着姿のご婦人に「ご一緒にどうぞ、召し上がりませんか」などと私が誘っても、彼女たちは「いえいえ、とんでもございません」と辞退される。これが、当たり前前の風景でだれも文句をいわない。こんなことでも慣れつことになる、「おかしいじゃないの」という感覚が、私自身次第に麻痺していくのが恐ろしい。■

（きむら・たみこ 区議会議員）



5年前、2才児に引かれる老犬オレ

はるこ

育つ力

結婚し、一年して犬を飼い始めた。雌の雑種でオルという名前がついていたので、「お留守番犬」という枕詞をつけ、可愛がった。一年目に発情すると、どの馬の骨か分からない雄犬がやってきていた。明け方にいつもと違う鳴き声で気がつき、こういう時は水をかけるんだと思いついて外に出た時はもう逃げていた。娘を持つ父親の気分はこれかと思った。しばらくして三匹の子犬が産まれた。初めから終りまで餌から離れない食い意地のはった奴、何処へでもさつさど行ってしまう好奇心旺盛な奴、人の足の間に隠れている臆病な奴、と三匹の性格がそれぞれあつて面白かつたが、可愛いうちに知人に見せて回り、嫁ぎ先を決めた。自分たちも可愛い時に見せられ、つい飼うはめになったのだつた。

祥太が生まれ、犬どころではなくなつた。てんかん発作や強い緊張が昼夜なく続く状態と、障害という言葉に振り回されていた。二人ともヘトヘトだつたが命を育てていると実感した。次男友雄が産まれ、何もしてやらないのに勝手に育ち驚いてしまった。三人目は予定外に授かつてしまったが、もつと放つたらかしてもよく育つた。祥太がいた

ので手をかけられず、運良く過干渉は避けられた。互いに幸運だったと思う。祥太がいなかったら、なんとなく抵抗を感じながらも、結局は競争のスタートに並ばせ、ヨイドンにあわせて尻を叩いていたかと思う。

祥太を育てていると、本人の育つ力が備わっていないければ、回りがいくらお膳立てしても駄目ということが分かった。訓練を早く始めても、量を増やしても出来るようにはならない。出来るようになったとしても、訓練のせいなのか元々持っている育つ力なのか、本当のところは分からない。祥太が十六歳になってみると、訓練は目標に早く到達するか、今の力を維持するか、後退するのが遅くなるだけだと思う。訓練で辛かったり痛かったりばかりだと、訓練自体を拒否するようになる。引き替えに失なってしまうものがあるのだ。そこに気がつく結構恐ろしくなつた。オルだつて「待て」「良し」ぐらいは覚えたが、それ以上のことを教えようとして、出来ないのを叱つたりすると怯えるようになった。ただ撫でてやろうと近づいても、尻尾の振り方に勢いがなかった。警戒していた。これ以上続けると、呼べばすつ飛んで来て、撫でてくれとすぐおなかをだす関係ではなくなりそうで、諦めた。

「放っておけるのは英雄君が勉強出来るからよ。あんた、こんなことも解らないの!とつい叱つたり、尻を叩きた

くなるものよ。特別できなくてもいいけど、みんなに付いていつて欲しいのよ」と友人は言う。解らなくもないがそこに落とし穴がありそうだ。みなと同じという気持ちは、皆より出来るという気持ちに繋がってはいいても、皆より出来なくてもいいのとは全然違うと思う。祥太を育てていると、このまま何も出来なくてもいいと思ってしまう。このまま五体不満足で結構。ただ元気でいてほしい。

今日も夕食を皆で食べている。いまだき贅沢なことになっていくらしい。「千明、野菜も食べなさい。喋つてはつかないで、口に入れなさい。友雄、最近お手伝いしないじゃない。今日は二人で後片付け頼むからね」と、とても美しい団欒ではないが、この時間は家族を実感できる。

* * *

妻のいいぶん……千明のランドセルから学期末の国語のテストが出てきました。漢字の出来が惨澹たるもので、「エーッ!二年生の漢字がこんなに書けなくてどうするの!っ!」思わず叫んでしまいました。「待てよ……。漢字なんて書けなくたってこいつはしっかり生きていけるに違いない」と、祥太を抱っこして夕食を食べさせながら、つくづく思つたのでした。

治子

「大人」ってなんだ？

松本 一郎

が子どもの頃よりも満ち足りた日常を送っているのだろう。時代とはそんなものだと思う。

満ち足りない日々をすごしていた子どもが大人になり、家庭を築き、子どもを育てる、その時にはきっと「自分の子ども時代のような、不自由な思いをさせないように子どもを育てたい」と、考える。しかし「何が満ち足りていなかったのかははっきりしない。結局は、子どもの頃に過ぎた時間を（ステキな自由に満ちあふれた時間だった）と考えるか（不幸で不自由な満ち足りない時間だった）」と思うかの差なのだ。

不自由と感じ、そのことがはつきりと自覚できたら、それ以外は自由なのだ。いつも不自由ばかりだと思っただけでも、それは自分を悲劇のヒロインにしたいだけだったりする。そんなものだ。

我が家は両親が芸術家を自称していたので、変わった人たちが出入りしていた。

芸術家、絵描き、役者、童話作家、その中には、今も芸術家としてたまにテレビにでてくる「クマさん」（篠原カツユキさん）や、役者の山谷初男さんがいたりした。夕方になると、どこからともなくそんな人たちが集まり宴が始まる。いつもワイワイガヤガヤと楽しそうだった。

夜の8時になると、子どもは床につくというルールがあった。ルールがあっただけで、そのルール通りにはいかなかった。だから、布団に入り、薄暗い部屋の天井を見上げながら、遠くから聞こえる笑い声にあげがれを抱いて寝入っていた。たまに、笑い声が罵声混じりの喧騒になり、なにやら庭でドタバタと喧嘩が始まる。寝室の窓のすきまから覗くその

子どもの頃、早く大人になりたい
と思っていた。

全ての子どもが、きつと同じこと
を考えていたと思う。

どうもこの頃は（大人になりたく
ない）と考える子どもが増えている
というウワサを聞く。きつと、ボク

光景をワクワクしながらながめていた。朝起きて居間にいくと、アルコールのすえた匂いと、食べのこした食べ物の匂いが入り交じっていた。それは悪臭ではなく、なんとなく大人の匂いがした。

小学校3年生の時、毎朝、学校に行くのが苦痛だった。毎朝、学校に行くために気力を奮い立たせ玄関を出ていた。

通っている小学校は、子どもの足で30分位はかかったと思う。秋になると、せめて少しでも楽しみをみつけようと、途中にある桑畑でムラサキに色づいた実を食べながら登校していた。そして、口のまわりがムラサキ色になるので、桑の実を食べたのがばれてしまい、登校早々、担任の先生に叱られてしまうのだった。頭ごなしに叱られても、なぜ食べて

はいけないのかわからなかった。食べてはいけない理由がよくわからなから、また食べた。そして怒られた。今から考えると不毛なコミュニケーションだったなあとと思う。

桑の実を食べ終わると、とたんに、学校に向かう足が軽やかにすむはずもなく、まさにドボトボと歩いていると、前から汚い格好をした男の人二人が肩を組んで歩いてくるのが見えた。その人は今風でいうと「ホームレス」、その当時は「浮浪者」と呼ばれている人で、ウチの近くを流れる多摩川の河川敷や橋の下をネグラにしている方だと分かった。そして肩を組んでいる相手は、彼ほど汚い衣装ではなかった。

その二人は大声で歌を歌い、楽しそうにしていた。

酔っぱらっているのは遠目でも分かるくらいに千鳥足で、たまによる

けて転びそうになり、それがまた楽しいという風に大声で笑っていた。

これからどんな苦痛な目に合うのかと肩を落とすとボトボト歩いているボクとは対象的に、これ以上楽しいことはないというくらいに笑顔の二人。だんだんに近づいてくる彼らをよく見ると、少しきれいな服を来ているのが、自分の父親だと分かった。

朝の陽の光を受けて、彼らがキラキラと輝いてみえた。そのキラキラはきつと、イヤなことをしなくても過ごせるからだったかもしれない。そうか、大人になると学校にいかなくてもいいんだな、とその時に初めて気づいた。そして、早く大人になりたかった。

(まつもと・いちろう／キミ子方式・講師)
◎ご感想・ご意見おまちしています。

メールアドレス

ichiro-m@ka2.so-net.ne.jp

大曼蛇羅

図鑑

連載●第15回●葛森 樹

災難続きで大変である。極秘に引越した先の電話番号を、ストーリーカーのおばさんに突き止められて、また電話番号を変えた。いつたい何度番号を変え、引越しをするはめになるのやら……。元氣も失せた。

というわけで、あちこち探しまくってご機嫌を損ねた方も、ご心配いただいた方もいらしたと思いますが、お許しください。最新の連絡先は、We編集部のご好意で預かっていただいています。お尋ねください。

さて、本題に。「あの琉球大学の授業はどうなったか？」です。実際よく聞かれます。「非常勤で授業を持つと書かれた朝日の記事は4月1日付け。エイプリルフルだから、冗談じゃないの？」

いえいえ、これは本当です。ジェンダーの社会学という名目の授業も、残すところあと3回。気がつけば、生まれて初めて他人を探点する側に……。これがなんだかぴんと来ない、柄にあわないし恐ろしい。だいいち沖縄の夏は暑い。それで「レポート出してくれた

人はみんな合格よ」と本気で言ってみた。ところが、喜ぶと思ったら教室のあちこちが騒がしい。ぶーいんぐである。「何で？」と口をとがらせて聞いたら「レポートに対しての個別のコメントがほしい」と代表の学生に真顔で言われ、教室が一斉に同意したのだった。ウツ、真剣な眼差しにドキドキしてしまつた。結局、百人以上のレポートをマジメに個別回答する約束をさせられ、それが私の夏休みの宿題に。これは幸せな災難だった。それにしても大教室を見渡せば、女性の社会人学生も多く、スカートの男の子も違和感なく座っている。回を重ねるうちに「実は下の弟が……」とジェンダーを越えたい思いの高校生を連れてきた女子学生もいた。「実はぼくはゲイで」「実はわたしはレズビアン」など、授業が終わると前に来て、率直に語ってくれる学生たちも少なくない。十年前には考えられなかった光景が、ふとうれしい。

(つたもり・たつる/作家)

●番外編⑤

「WEN—DO」でパワーアップ

河村ふみ

A Tのお陰で、かなりパワーアップした私ですが、あと残された課題は、肉体的強靱さ。いつだったか、「今度、護身術を習おうかな。それで私はもう怖いものなしだから」と夫に言ったら、「よし、試しにやってみな」というので、夫を相手にレスリングのまねごとをしたことがあります。後ろから羽交い締めにされて、軽く持ち上げられてしまい、腕をほどこうとして、私は足をはたばたさせながら「ウーン・ウーン」と唸っただけで終わりました。

私を知らないで私の本を読んだ人は、みなさん肝っ玉母さんのような人物をイメージするらしいですが、実物は、身長158センチ、体重43キロのへなへな女なのです。それが、つい先日、フェミックスの企画で、「WEN—DO」ワークシヨップというものをやったのですが、これが、ものすごくよくて、私は完璧にパワーアップしてしまいました。誰？ もう護身術の必

要もないでしょうなんて陰口たたいているのは？

私だって、たまにはナンパされたりすることあるんですよ。いつだったか、歌舞伎町を歩いていたら（私の家は歌舞伎町から数分のエスニック通りと言われる通りに面しています。住所を言うと、「エッ、あそこって人が住めるんですか？」なんてよく言われます。みなさん危険な区域だと思っているようですが、一晩中、人通りが絶えないから却って安全なのです）、ずっと家の近くまで、お茶を飲もうよとついて来た男がいましたし、エスニック通りを歩いていたら、「サンマンエン、サンマンエン」とつぶやきながらついてきた男もいました。はじめは何のことか分からなくて、「ハ—ッ？」だったのですが、ああ、私を3万円で買おうという意味ねと分かって、「冗談じゃないよ。私はそんなに安くはないよ。それにこちだつて選ぶ権利があるんだよ」と言いはしませんでした。完全無視を決め込んで、毅然として歩いていたらそのうちどこかに消えました。でも、エレベーターにまでついて来られたら怖いですから最後はダツシユです。

先日もある雨の日、サルサ友だち（一緒にサルサダンスを踊りに行く30代の女性）と池袋で待ち合わせて、ある銀行の前で待っていたら、その銀行のキャッシユ

デイスペンサーから出てきた若いフランス人だとかいうちよつとハンサムな男性に「大丈夫？どうしたの？」と声を掛けられ、私が元気なさそうに見えたのかなと思つて、「大丈夫ですよ」「何してるの？」「友だち待ってるの」と受け答えしているうちに、友だちがなかなか来なかったので、しばらく話し込む羽目に。そのうち、「友だちはいいから、うちに行こう」なんて言い出した。初めて会ったばかりでうちに行こうなんて言うか！コイツ変！と思つたので、「いや、約束したから、待ってる、来たら一緒に踊りに行こう」と逆ナンパしてやりました。

そのうち、友だちも着いて、その男のお兄さんだとかいうハゲのおっさんもどこからか現れ、私たちについてくる格好に。雨が降っていたので、半ば強引に傘に入れられ、肩を組んだりしてくる。ハゲのほうが。その馴れ馴れしさに不快感がつのつてきたが、体をよじったくらいでは腕を外してくれない。「なんで、私はハゲで、あつちは若いほうなのよ」と、それもあつて、よけいムカムカしてきた。ちょうど交番があつたので、そこでやっと逃れたのですが、お金目当てもあつたらしく、友だちが「ワタシ、今日はお力ネ持つてないよ」と私に言ったのを潮に、何やら外国語で揉

めている風でしたが、そのうちいなくなりました。彼女はいつだって、お金持っていないんですけどね。

私だって、まだ女として見られるんですよと証明するつもりが、これでは墓穴を掘つたみたいですね。マ、いつか。あの時に、「WEN-DO」を知っていたらもつとカッコよく撃退できたのになとつくづく思いましたね。

「WEN-DO」、私たちはウエン・ドゥだと思つていたのですが、女性のための武道の意味で、ウエン・ドゥ(道)なんだそうです。トレーナーは、*エミリア*(キュースティ)というカナダから来た30代の女性。ワークシヨップの前日フェミックスに打ち合わせに来てくれました。落ち着ついた物静かな感じの女性で、この人が？と思つてしまうような人でした。私はテンションの高い人は苦手です。人をエンパワメントするのだから、テンションが高いほうがいいように思われるでしょうが、そのときはいいけど、後で振り回されたように感じてしまうこともあるものです。

ワークシヨップの内容は、防御や攻撃の仕方を*エミリア*がやってみせ、それを真似てまず全員でやってみます。次に2人ずつ組みになって襲う側と襲われる側をやります。全員でやるときの配置は円陣を組んで、

皆が中央を向くような形になっています。型に合わせ腕や足を動かすのですが、そのときに呼吸もつけません。ハッ、ハッ、ハッというような具合に。ちょっと文章で表現するのは難しいです。同じ型を3回か、5回連続してやり、最後は声を出します。これを「*スラッシュ*」は「キアイーツ」と言っていました。これがいいですね。快感！

だって、日常的に「ハーツ！」なんて大声を出すことなんてなかなかできないでしょう。そうそう、フェミックスの裏は、ある銀行の集配センターになっていて、夕方になると、すごい叫び声（気合い）が聞こえてくるので、はじめは何が始まったんだろうとびっくりしましたが、窓から覗いてみたら、どうも警備員の体操というか、訓練みたいなんです。きつとあれも強盗に襲われた時のための訓練なんですね。社長（稲邑さん）に、裏の銀行に負けずにこれからフェミックスも朝の準備体操にやろうよと言って笑ったのですが、やらないでしょうね、おしとやかな稲邑社長は。その稲邑さんだって、ワークのときはちゃんと大声を出していたと思います。思いますというのは、もう他人のことなんてどうでもよくて、あんまり人を観察して暇なんかなかったから。みんなが声を出していないけれ

ば、あんなにすごい声にはならないはずだし。とにかく、そういうふうになおきなく声を出せるって、それだけで元気になれるんですよ。

いつか、キヤーツって声を出せるだけでも恐怖は半減するってことを書きましたよね。*スラッシュ*も言っていました。声を出すということは、息を吐いていることだから、息を吐けば次に空気が入ってくる。息を止めてしまおうと、頭が働かない。頭が真っ白になるということはそういうことなんです。頭に酸素が入り込めば、思考も働くから次に何をしようかとか、何ができるかと考えることが可能になる。それから、大声で叫べば、相手はびっくりして一瞬怯む。これは逆に相手の頭を真っ白にする効果があるということなんです。性暴力やセクハラに加害者のアンケートでもわかるように、加害者はどういう人を狙うかというと、気弱そうに見える人、何も抵抗しないだろう、訴えないだろうと思える人を狙うわけです。性的魅力を感じて狙うわけはありません。痴漢に狙われるのは自分に性的魅力があるからだとか勘違いしている人がいますが、これは大いなる勘違いです（私も自分がされたときはつい勘違いしなくなっちゃう気持がなきにしもあらず）。

で、そんなふうに、加害者は、相手は何もしないだ

ろうと予定しているところへ、「ギャーツ」と叫ぶわけですから、予定が狂う。予定が狂って加害者が戸惑っている隙に逃げ出すことも可能だし、反撃（攻撃）を加えることも可能になるというわけなのです。

防御の仕方については、いろいろなバージョンがありますが、たとえば、首を絞められたとき、首の絞められ方にも、前からの場合、後ろからの場合、普通の絞め方、プロの絞め方（プロというのは、軍隊で訓練を受けた人とか、格闘技の技を持っている人とか、殺人者など、効果的な首の絞め方を知っている人ださうです）、その他にも絞められ方によって、防御の仕方も変わります。

攻撃には、「SOFTWARE」と「HARDWARE」があり、ソフトの方は、相手に打撃を与えるだけのもの、しばらく動けないようにしたり、気を失わせたりするが、致命傷には至らないもの。ハードのほうは、致命傷に至らせることができるもの。「このワークシヨップを受けて学んだことを人に教えてもいいですが、ハードは教えないでください。シークレットだ」と言われましたので、ここには書きません。でも、自分が人を殺せる力を持っているんだと思えるだけで、かなりのエンパワメント。もう、私はか弱い

やせつぼちのへなへな女ではありません。人を殺すことだってできるんだから。

さて、防御は、首を絞められた時だけではもちろんありません。痴漢にお尻を触られた場合から寝込みを暴漢に襲われたときまでさまざまなシチュエーションをやりました。でも、それほどいっぱい防御の仕方があるわけではなく、基本の技を組み合わせて使うので、ときどき、忘れないように練習すれば大丈夫さうです。寝込みを襲われたときも、仰向けのとき、俯せのときとやりました。仰向けのとき、上にのしかかられて腕を頭の上で押さえ込まれて身動きができないとき、どうすると思いますか？

膝をたてて、「ハーツ！」と気合いを入れながら、一気に腰を持ち上げます。このとき、手も同時に腰のほうにさつと下げます。そうすると相手は自分の頭の上のほうに突き飛ばされてしまいます。これは、3人で組んで練習しました。暴漢役の人が突き飛ばされてけがをしないように、サポート役が必要で、サポート役の人は、寝ている人の頭のほうに待機して、暴漢役の人の肩を掴んで支えています。これをやったとき、稲島さんともう一人の人と組んだのですが、時間切れで、襲われる役をできなかったので、後でやらせても

らいました。ホントに私の体力で上にのしかかった人が吹っ飛ぶのかどうか疑問だったので。そしたら、ちやんと吹っ飛んだのです。これを読んでやってみようという気になった人はくれぐれも注意してやってみてくださいね。二人だけでやるのは絶対やめてください。けがをしても私は責任持てません。安全な場所でやる時も、暴漢役の人が一度全身の体重を徐々に前のめりにかけていって、その全体重をサポート役の人が支えられるかどうかを確認してからやります。私は支えられなかったので、サポート役はやめました。

これは家に帰ってから試みませんでしたが、他の首を絞められるのや、後ろから羽交い締めにされるバージョンは、夫を相手に試してみました。見事成功。これでわが家のDV対策も万全です。そうそう、「相手サポートナーだつたりすると、そこまでやっていいのかと思ってしまうのか」という質問がでたのですが、**空豆**は、「暴力を受けているときは、あなたが愛しているいつものサポートナーではなくて、加害者なのだ」と言いました。もちろん、暴漢でも相手を殺す勇気がないのなら、「ハードWEN-DO」は使うなどということでした。自分が殺されようとしているときに、相手に致命傷を与えたくないなんて、相手のことを考え

る必要がどこにあるんでしょう。私は、遠慮なく致命傷を与えてやるつもりです。

ワークシヨップで、これだけは全員が覚えただろうというのが、「ソフトWEN-DO」の玉（拳丸）つぶしです。空手チヨップの手形をつくり、親指側を上にして肘から先の腕全体を使って、下から一撃を加えます。それから、玉を掴んで捻って引つ張るというのもありました。これはやりたくないよね（気持ち悪いという意味だと多分思います）というのが大方の意見でした。

空豆は、イメージも大事だと言いました。ふだんから、相手がこうきたときには、こうするということや、なことを頭の中でイメージすること。言われなくても、「WEN-DO」が終わってしばらくは、ついイメージしてしまいました。電車の座席に座っていて、前に男が立つと、「コイツが、変なことしたら玉つぶしだ」と私の頭の中はイメージでいっぱい。ついそこに目がいがるを得ないので、これは逆に誤解される危険性なきにしもあらず。でも、気迫が漲っているから、変態だとは思われませんでしょう。

「WEN-DO」で習った防御や攻撃の型をときどきやっている、元気がからだに漲ってきます。これ

は思い過ぎではなく、傍目にもわかるようです。

5月号で、実家のことを書きましたが、あれを書いたあと、「でも、父もかわいそうだよな。ストレスがたまるだろうな。あれでは病気になるぞー」と思っていたら、ホントに病気になるってしまいました。その父の入院する病院に見舞いに行つたときのこと、消化器の病気なので、食べるものはダメだし、花も庭にふんだんにあるから買つて行つたりしたら怒られるだろうしと考えた末、娘の記事が写真入りで載つた大学の進学案内と私の本『わがままな女は幸せになれる』を持つていきました。私の本を読んで肩こりが治つたという人もいることだし、少しは元気づけられるんじゃないかと思つたのです。それに、父には自己主張が必要でし。私が「激励に来たよー」と言つて一気にそれらの本の話をしてたら、父が何か言つたのですが、私には聞こえなかつたので、母に「何だつて？」つて聞くと、「なんか、おまえが力強くなつたつて」と言うではありませんか。これは、「WEN-DO」効果だどとつさに思いましたね。母が、「おまえが本出したつて、売れるの？」と、例によつてグサツとくる言葉を吐いてくれましたが、私は怯まず、「売れてるよー、

評判いいんだよー」と言つてやりました。

それから、また、手術後に行きましたが、父は元気ありませんでした。妹の話によると、「本は、おばあちゃんが読んでる」と言う。あんたは読まなくていいの！（これは私の心の声）。

それからまた、数日後、大崎のアテナ・ホリスティックセミナーというところで、「ハーツ・オンまつり」というのがあり、弟子たちと易占を出店しました。いつだったか、編集後記に誰かがオーラ写真のこと書いたと思います。フェミックスは怪しいつて。私が最初にオーラ写真をとつてからもう3年位は経つんじゃないかと思ひます。私が撮りに行く前にフェミックスのみんなは撮つて来ていて、みんなオーラの色が紫やブルーで綺麗でしたので、私もそういうものを期待して行つたら、全部オレンジだったので、ギョツとしました。がっくりきたんです。見た瞬間は。だつて、それまでオレンジが一番嫌いな色で、オレンジ色の洋服だけは着たくないと思つていたくらい。それは、まるで、天照女神のようでした。小さい頃、実家の床の間には天照大神（わたしは、テンテルダイジンと読んでいました）の掛け軸がかかっていました。それをとつ

さに連想しました。

そのとき、言われたことは、オレンジは創造性を意味しているから、あなたはこれから何か創造的な仕事をするだろうということでした。最近、2度目のオーラ写真を撮りに行ったフェミックスの人たち2人が、前とはがらつと変わって真っ赤なオーラだったので、確かにその2人は最近元気になってきた人たちなので、元気が出ると暖色系が出てくるんだなと思いました。

「ハーツ・オンまつり」で、そのオーラ写真のブラスもあつたので、私も撮ったのですが、相変わらず、オレンジでした。正確に言うと、ゴールド・オレンジ、オレンジの上にゴールドがつくんですよ。「今、とても強いエネルギーが出ています。背景がほとんどないくらいオレンジで埋まっているので、かなりオーラが強いです。こういうオーラは、ふつう気功師の人とかに多いのです。あなたはこれからだを使つて人にエネルギーを与える仕事をするといいでしょう」と言われました。また、「ごく最近、三度位宇宙的というか、精神的なことでも何かともいいメッセージを受けましたということが出ています」とも言う。ああ、それは「WEN-DO」のことだろうと思いました。弟子の

Nさんも、「私も撮つて来る」とブラスに行ったのですが、「彼女はの間撮つたばかりでそんなに変わらないんじゃない」とか、「いや彼女もWEN-DOのワークシヨップを受けたから変化があるかもよ」なんて言いながら待っていましたら、なんと、ひと月ほど前はブルーとグリーンだけだったオーラに、暖色系が少しですが、くつきりと弧を描いて加わっていました。驚きです。

言葉で「あなたは力があるよ、やればできるよ」と自己尊重度を高めようとしても、なかなかですが、「WEN-DO」は、目に見える形で、自分には力があるのだと証明してくれるパワフルなワークシヨップでした。もつと多くの人に「WEN-DO」を広めたいなど切実に思います。私がもう10年若かつたらカナダに研修に行くんですけどねえ。稲岳社長は、研修旅行を企画すると言つてます。興味のある方はご連絡を。

(かわむら・ふみ フェミックス・カウンセラー)

● 『わがままな女は幸せになれる——』(E.S. 自己主張・自己表現トレーニング) (河村ふみ著) の姉妹編をメルマガで配信しています。

子どもと若者の 居場所

発行・萌文社

2000円＋税 2000年7月刊

久田 邦明

今日のように親が子どもの養育に関心をもつ時代は、これまでなかったのではないだろうか。

受験教育への関心は高校や大学の受験から中学校や小学校の受験、更には幼稚園の受験準備教育へと広がっている。親の関心は受験教育だけではない。生活のあらゆる分野で子どもに関心が向けられるようになってきている。

このようなことをいうと、「いや、違う。親は子どもの養育に無関心に

なっている。そのせいで子どもに暴力を奮ったり、放置したりするなどの虐待が広がってしまっているのではないかと、反論されるかもしれないが、わたしは、深刻な親の問題もまた子どもの養育への関心が偏ったかたちで高まったなかで生じたものではないかと疑っている。

それでは、親が子どもの養育に関心をもっているにもかかわらず、子どもや若者の状況が厳しくなっているように見えるのは、どうしてだろうか。その理由は、「生みの親」や「育ての親」だけが子どもの養育を引き受けることに無理があるからである。

子どもの養育を親だけが引き受けるようになったのは、それほど古いことではなく、一九六〇年代の高度経済成長期以降のことである。それまで子どもは、生活共同体としての

地域社会のなかで、家業を通してつけられたり、地域の大人に世話をやかれたり、子ども集団のなかで社会性を身につけたりしてきた。そこには実に周到な仕組みが備えられていた。例えば三重県の答志島には、日本でただ一カ所、宿親の習俗が残っているが、この事例こそ、そのことを教えてくれるものである。宿親とは、十代から二十代の若者たちを自宅に宿泊させて面倒をみる「親」のことである。男子は中学校を卒業すると、宿親の家で寝泊まりをする。昔と違って高校生の場合は週末だけの宿泊になっているが、高校卒業後は毎夜、宿親の家で過ごす。これがメンバーの一人が結婚するまで続くのである。

この例にみられるように伝統社会には複数の「親」たちが子どもの面倒をみる仕組みがあった。このよう

な事実をみれば、子どもの養育が親だけに委ねられていることの不自然さは明らかだろう。

戦後、地域社会の解体にしたがつて子どもの養育は学校教育に委ねられるようになった。そうはいつても、学校教育だけで子どもの養育がカバーできると考えられていたわけではなく、地域社会では「青少年健全育成」の合言葉の下で団体育成と非行政策を中心とする行政施策がすすめられてきたわけである。しかし、今日では、学校教育が無力になると共に、従来の青少年健全育成の施策もうまくいかななくなっている。どうしたらよいのだろうか。

『子どもと若者の居場所』は、このような状況のなかで、大人に求められる役割を、「居場所」というキーワードを通して明らかにしようとしたものである。

子どもや若者が大人になるには、大人と距離を置いたところに独自の空間や人間関係が必要不可欠である。それを「居場所」と呼ぶとすれば、大人の役割は、子どもや若者のために、それを確保してやることである。昔はこのような仕組みが地域社会の日常生活のなかに組み込まれていた。子どもたちだけで泊まり込む「おこもり」や、カミサマの身代わりとして家々を回る「勧進」などの習俗は、とりわけ注目される。教育関係者が評価するガキ大将集団も、自然発生的に生まれたものではなく、このような習俗を基盤とするものだったのでないかと、わたしは想像している。

このような歴史的な経過をみて、この本には、「居場所」の確保を通して子どもや若者の支援する活動をまとめた。なかでは、行政施設や民間団体のスタッフが、それぞれの活動

を報告している。それらは、中・高校生のための児童館「ゆう杉並」(東京都杉並区)、不登校児童生徒のための「ほっとスクール山城」(世田谷区)、ロビーにやつて来る中学生たちの面倒をみる「京都市南青年の家」などである。

ところで、少年法改定を巡る疑問なども盛んだが、そこでは議論が状況対応的なものに傾いているようにみえる。これまでとは違った青少年施策の方向も、この本に報告される活動の検討を通して明らかになるのではないだろうか。

ひさだ・くにあき 神奈川大学、東京学芸大学などの兼任講師として社会教育主事過程の講義を担当。著書『教える思想』(現代書館)。共著・分担執筆に『現代社会教育の課題と展望』(明石書店)、『新社会教育講義』(大空社)、『生涯学習時代の社会教育』(明石書店) など。

編集後記

●安心して性を語れる場は子どもにも大人にも本当に少ない。昨年

横浜市女性フォーラムで北原みりさんの講演会を開いたとき（We 2000年2/3月号参照）、女性向けにと思つて企画したにも関わらず、終了後に若い2人の男性が、「僕たちの聞きたかつた内容で、すごくよかつた」と話しに来てくれました。グループの話し合いだと安全な場であることを保障するために秘密の厳守のルールとか、ファシリテーターが必要ですが、学校の授業でも匿名で公表して良いか了解を得た感想をワープロで打つて次の時間配ると、友達の高い感想を読むだけでも「悩んでいるのは自分だけではない」と安心するようです。

ひとつの概念ができる、名前がつくということはずいことだなと思います。性虐待もドメスティックバイオレンスも、アンペイドワークも名前がついて明るみに出

ることでこれまでの思考の枠組みがコベルニクスの的に変わつて、物事が見えやすくなる。

性虐待に関しては横浜市女性協会発行のリンダ・ハリディ・サマナーさんの講演録『許すのは私の役目ではない』（TEL045-862-0808/5000円）がお薦めです。

『ジェンダーに敏感な学習を考える会』は、小中高の学校教育、女性学、生涯学習、研修等の現場で活用できる体験学習のプログラムづくりをめざした会ですが（99年10月号参照）、その試行錯誤をまとめた報告書『ジェンダー・フリーからジェンダー・センシティブへ』が完成しました。お申込み、お問合せは稲邑まで（A4判96ページ）。木村菜さんの連載が書下ろしもたくさん入れて素敵な本になりました。『女が年齢を愉しむとき』（発行はるく書房・発売星雲社）。水田さんの連載は今回はお休みです。（稲邑）

●今月号は「性」がテーマだとい

うので、じゃあATは「パートナ―との間で、そこがいの、あつちが痒いのと言ってますかあ」なんてことを書けばいいんだと思つていたのに、まるで逆の内容になつてしまいました。おまけに早々と書き始めていた出だし半分のフロッピーはどこかに行つたまま行方不明、しかも諸事情により7ページもの長編に。「どこが番外編だあ」とひとり騒いでいます。（河村）

●どんだんパワーアップするシャチョーと河村さんの横で、へろへろの私です。稼ぎ仕事がよく終わり、お預けにしていた「アリー・マイ・ラブ」のビデオを見ては、「マイソング」を見つけて私もパワーアップせねばとか、ボクシングでもやつて攻撃性を発散させないとまずいかなとか（ミーハーだからすぐ触発される）。仕事で奪われた気力を今度は楽しむことで取り戻さなくちゃ、夏休みはだらだらと過ごそうつと。（中村）

くらしと教育をつなぐWe 2000年8/9月号（85号/vol.9No.5）2000年8月1日発行

定価……680円（本体価格648円＋税）（年間購読料7500円/送料共）

発行……femix・フェミックス

〒154-0001 東京都世田谷区池尻3-2-3サンケイランドハイツ703

tel & fax 03-3424-3603 E-mail: femix@mail2.alpha-net.ne.jp

http://www3.alpha-net.ne.jp/users/femix/

富士銀行 池尻大橋支店 普1501277 郵便振替 00130-7-754314 (有)フェミックス

編集……稲邑恭子・中村泰子 装幀・イラスト……川口民子 印刷……(有)イー・エム・ヒー

●本誌掲載記事の無断転載、複製をお断りします。

不登校新聞

<http://www.futoko.org>

Phone 03-5360-1231

月2回発行ブランケット版6P

理屈
じや
ない
んだ
よね



見本紙、無料送付します

全国不登校新聞社

購読ご希望の方は、編集部に直接お申し込み下さい。
電話、ファックス、E-mail、あるいは郵便振替で
○号から購読希望と明記して年間購読料7500円を
お振り込み下さい。

- 定価 680円 (本体価格648円+税)
- 年間購読料 7500円 (10冊/送料共)
- 郵便振替00130-7-754314フェミックス

「くらしと教育をつなぐWe」は、もともと家庭科の男女共修の実現のためにスタートした月刊誌ですが、従来の家庭科の枠を超えて、さまざまなテーマを取り上げています。

■2000年特集

4月号 違いとつきあう/5月号「国旗・国歌」考
6月号 ジェンダーの視点から「働くこと」を考える
7月号 フェミニズムへのバックラッシュ?!

■連載

女が歳をとるとということ 木村栄◇家事神話—女性の貧困の
かけにあるもの 竹信三恵子◇書物逍遙/シネマの魔 武田
秀夫◇新米議員のジェンダー議事録 木村民子◇乱読大魔王
日記 冠野文◇ひげのおばさん 子育て日記 中畝常雄◇過
去を振り返らない/先を考えない 松本一郎◇ジェンダーフ
リー大曼陀羅図鑑 蔦森樹◇自己表現トレーニング 河村ふ
み◇終幕 水田宗子

■女と男の家庭科新時代

授業実践—家庭科・風がかわる 匂いがかわる
熊本発・困ったときの一発ネタ
かる〜い家庭科相談室
食の歳時記 入江一恵・坂本 薫
新・オホーツクの潮風荒く 江口凡太郎

◎バックナンバーも販売しています。バックナンバーの
リストをご希望の方はお問い合わせください。

■We の置いてある書店■

- 北海道 ●旭川—こども富貴堂
東 京 ●表参道—クレヨンハウス
●東京ウィメンズプラザ内—パッチワーク
●新宿3丁目—模索舎
●西荻窪—ナフ・ブラサード
大 阪 ●ウィメンズブックストア松香堂
●江取—クレヨンハウス
広 島 ●家族社

(書店でご注文の場合は「地方小出版流通センター取扱い」とし
てお申し込み下さい。)

くらしと教育をつなぐWe 読者募集

フェミックス tel & fax 03・3424・3603

〒154-0001 東京都田代谷区池尻3-2-3サンケイグランドハイイツ03

<http://www.3.alpha-net.ne.jp/users/femix/>

E-mail femix@mail2.alpha-net.ne.jp